

うちの指揮官はコミュ
力が高過ぎる。

創作魔文書鷹剣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼女達が消耗品のように棄てられていく世界が、心を持つ彼女達が蔑ろにされていく世界が、納得いかない。だから、ナターシャ・E・ロックハートは指揮官になったのだろう。指揮官のスキルと心理療法のスキルを併せ持つ彼女は相棒のVictorと共に、類稀なるコミュ力（& a m p ;変態性）で人形達のお悩みを解決したりしなかったりする……

目次

解説はこちら	1	ワンコMOD	47
第一戦役 愛情		結局こうなるんだよなあ	54
コミュニケーションは大事	4	人類悪顕現	60
AR小隊とVector	9	存在しない部隊	68
資料① AR小隊について	15	完璧・・・?	74
レッツ、お悩み相談「M4の場合」	18	前線基地奇襲作戦	79
一杯のコーヒー	24	強襲	84
会話に混ざりたい彼女	29	ハイエンド	90
若さなんて無かった	35	事後処理と明日への前進	95
医療前線	41	第一戦役 登場人物図鑑	101
		第二戦役 拡張	
		瓦礫の中から	104
		リベンジ・ドール	110

解説はこちら

〈登場人物〉

「ナターシャ・E・ロックハート」

R03地区に新設された基地に配属された戦術指揮官。コミュニケーション能力が異常に高く、1話時点で早くもスコープオンとFNCに懐かれた。初対面の相手でも5分あれば「名前」「年齢」「趣味」「家族構成」を聞き出せるという特技を持つ。

「人物」指揮官、或いは心理療法士としての能力は抜群に優れている。しかし人形達を溺愛するあまり変態同然となり、グリフィンの治安維持部隊に追いかかれた事も。これ程溺愛したのは最近かららしいが・・・？

「外見」年齢の割に見た目は若く、今年で30になるがどう見ても十代の若者にしか見えない。長い金髪も若く見える原因かもしれない。胸はそこそこといった感じ。

「交友関係」誰とでも話せる人物であり、交友関係はどんどん広がっていく。副官のVictorとは長い時間を共にしており「親友」と認識している。カーリーナのことをえらく気に入ったらしく「カリン」と相性で呼んでいる。それ以外では上官のヘリアントスとも縁深い。彼女からは複雑な感情を向けられている。(独身かつ異性に興味が無

いのはヘリアン的にありがたいが、永遠の命と揶揄される外見の若さに嫉妬してる。)ペルシカやクルーガーとは交流が浅く、「いる」以上の感想を抱かない。

「能力」昔から高いコミュニケーション能力を活かして戦術人形のメンタルケアを行っており、その手腕からグリフィン内で「ドクター・ロックハート」と呼ばれている。ドクターと言っても医者じゃないし山奥で魔術を学んだりしていない。コミュ力だけでなく洞察力も侮れず、彼女を相手に隠し事は出来ない。相手の本心を見抜いた上でちゃんと相談にのり、的確なアドバイスをくれるため人形達に大人気だが、自分に向けられる好意にも気付いてしまうのが悩み。R03地区に来る前から指揮官をやっていたがその時の話はしたがらない。

「趣味」人形の皆と楽しく暮らすことを夢見ており、人形達を蔑ろにする輩は殺したが程に溺愛している。Vector曰く「昔はこれ程じゃなかった」とのこと。誰が呼んだか溺愛変態色欲馬鹿。周りをイジるのが好きで特に恋愛や姉妹愛の話になると過剰に反応する反面、自分がイジられるのに慣れていない。

[Vector]

R03地区に配属された人形の中で唯一、基地開設以前からナターシャと親交がある人形。クールでアンニュイなのは変わらぬ。ナターシャとは数年一緒にやってきた親友同士。彼女が新人の時に出会ってからずっと副官を務め、そのコミュ力を見抜いたた

めにナターシャは「ドクター」と呼ばれるほどメンタルケアに注力する。

「能力」極めて高い戦闘能力を有しており、戦場においては敵の一角を崩して勝利を掴み取る優れたアタッカーとして活躍。デスクワークでも最高のパートナー（カーリーナと同等）として貢献してくれる。別に火炎瓶片手にところ構わず放火したりしない。

「趣味」ナターシャに影響されて何かしら趣味を持ちたいと願望が生まれた。でも何をしたらいいか迷い中。ピンクの可愛いフリフリな服には若干の憧れがあるが自分が着るような服じゃないと諦め、かわりにナターシャに着せようと画策したことも。ナターシャをイジるのは結構楽しい模様。

第一戦役 愛情

コミュカは大事

20??年・・・戦争と災害により世界は荒廃し、進化した技術力は人間に酷似したロボット「人形」を作り出した。やがて軍力は戦闘力を有する人形や無人機によつて賄われ、民間軍事企業は民生用の人形を改造した「戦術人形」を利用してその基盤を固める。これは、民間軍事企業最大手の「グリフィン&amp;クルーガー社」に勤める一人の指揮官が、部下の戦術人形達を類稀なるコミュカで支えるお話である・・・

《R03地区、グリフィン基地》

今日も基地内は忙しい。この基地にいる戦術人形は人類に反旗を翻した「鉄血工造」の人形と戦うのが主な仕事だが、それ以外にも担当地区内の警備や自主的な訓練などに追われて時間が足りないのである。特に指揮官は忙しく、戦闘中の部隊の指揮を執ったり、次々と回される書類に目を通してサインし、部下の人形達との交流も欠かさない。特にこの基地は新設された直後であり戦術人形の数が少ないのも忙しい理由の一つだ。この状態で満足に職務を遂行できる指揮官は大したものだ。

「・・・書類あと何枚？」

「23枚」

「OK、パパッと終わらせるよ。」

自分の執務室で書類の処理に追われてるのがこの基地の指揮官「ナターシャ・E・ロツクハート」で、その隣で書類仕事に付き合っているのが副官の「Vector」である。立場上是上司と部下という関係だが、この2人は長年連れ添った親友のような関係だったりする。

「終わり！とりあえず休憩だね。」

「……いつみてもホント早い。」

「ふふっ、ありがと。」

ナターシャが軽く笑うと、Vectorもつられて少しだけ口元が緩む。これが彼女が自然にできる笑顔の限界なんだとナターシャは知っているため、別に嫌な気持ちになつたりはしない。

「じゃ、散歩がてらみんなのところに顔だそっか。」

「あたしはパス……」

1人で執務室を出て、基地内を散歩しに行くナターシャ。Vectorが周囲と触れ合うのに乗り気じゃないのはわかっているし、彼女も1人で休む時間が欲しいだろうと思っていたからちようどいい。ついでに最近配属された人形とも交流しておきたいし。

彼女のコミュカにかかれば1人五分もあれば時間は十分。そんな時に都合良く誰かがやってきた。

「ふっふくん! しきかくん? こんな所でのんびりしていいのかな?」

「大丈夫だよ『スコープピオン』、もう書類仕事終わったし。」

「は、はやッ!?!」

ナターシャに絡んできたのは戦術人形の1人「スコープピオン」である。・・・スコープピオン 蠍といつても毒の尻尾は無いが。明るくお気楽でトラブルを呼び込む体質だが本人は気にせず、周りを振り回しっぱなしである。本人に悪気は無いが。

「指揮官さま、一緒にチョコ食べますか?」

更にもう1人やって来た。チョコレートを持って走り回る「FNC」はいつも甘味を求めて右往左往し、内緒のおやつ倉庫がたくさんあるらしい。

「3人で一緒に食べようね、みんなで食べると美味しいよ。」

「やった〜! ほらほら1個ちようだいよ〜!」

「うう、なけなしの・・・チョコレートバーです!」

ちよつと出し渋つたが、ナターシャと食べたい気持ちで勝り懐から3本のチョコレートバーを引つ張りだした。基地の一角で3人一緒にチョコレートバーを頬張る。たつたそれだけの事が楽しくてしょうがない。

「仕事中に休めるっていいね。」

「特に今は忙しいからね、ちゃんと休まなきゃダメよ。」

「指揮官さまと食べるおやつ美味しいです！」

「ちよつと！あたしのこと忘れないでよ！」

この時代にこんなに平和な時間は少なく、それ故にナターシャはこの時間を大切にす
る。その精神は執務室に堂々と掲げられており、「刹那の時間を最大に」と書かれてい
る。常に周囲とのコミュニケーションを欠かさず、上司と部下という関係を超越した友
達になりたいと願う彼女の座右の銘である。

「いつまで見てるのかな？出ておいでカリンちゃん。」

「指揮官さま……い、いえ！別に覗き見していたわけでは！」

廊下の角からひよつこり顔を出したのはこの基地の後方幕僚を担当する「カーリーナ」
である。まだナターシャとは出会って数日しか経っていないが、両者はすっかり仲良
くなり「カリン」という愛称で呼ばれている。カーリーナはナターシャのことを「指揮官さ
ま」と呼ぶがこれは彼女がナターシャの部下にあたるからであり、まだ愛称などで呼ぶ
ほどの関係じゃないと思っ
ているからでもある。

「よろしければ皆さまも一緒に、チョコレートバーをお買い上げいただけませんか？」

「うん！ほら、買いにいこ？」

スコープオンもFNCも喜んでついて行き、カリーナの経営するお店でチョコレートバーを買い足す。この何でもない時間も4人はお喋りを絶やさず、ナターシャも部屋に戻るまで笑顔のままだった。

「はい、一本あげる。」

「・・・ありがと」

因みに普段クールでアンニュイなVectorがこうやって人に感謝するのは稀であり、2人がどれだけ一緒にいるかが伺える。貰ったチョコレートバーを頬張るVectorを眺めながら、椅子に腰掛けてゆっくりと一息つく。

これから彼女は様々なハプニングや問題児に立ち向かい、基地の仲間達と固い絆で結ばれていくわけだが・・・彼女の行く末やいかに？

AR小隊とVector

ある日、R03地区でとある小隊がお世話になることが決まった。上にその小隊について尋ねても「規則により、答えられない」としか返答しない。答えられないということはその小隊が機密部隊であるということであり、半分答えを言っていると気づいた時のナターシャは悩ましいと言わんばかりに頭を抱えた。

「・・・わざわざ出迎える必要あるの？」

「上の命令で預かる小隊よ、向こうも気悪くしてるかもだから出迎えてあげなきゃかわいそうでしょ。」

入口でそんな戯言を言っているうちに件の小隊を乗せた車両が到着し、中から数名の人影が降りてきた。

「グリフィン本部の命令でこの基地に来ました。AR小隊のM4A1です。よろしくお願います。」

「M4SOPMOD——IIだよ！よろしくね！」

「コルトAR—15です。指揮官、私を失望させないでくださいね。」

「M16A1だ、ミッションなら私に任せときな。」

「ふふっ……私はこの指揮官、『ナターシャ・E・ロックハート』よ。この子は副官の『Vector』。これからよろしくね。」

随分と賑やかな面々がやって来たなどナターシャは笑った。自己紹介のついでにVectorの紹介も忘れない。基本的に彼女は初対面の相手に自分から話しかけるタイプじゃないからこういう時に自己紹介とかしらないし、それが原因で悪い印象を持たれないためにもフォローは欠かせない。

「此処が宿舎で、みんな此処に住むことになるんだけど……全員でルームシェアするタイプの部屋と普通の個室とどっちがいい？」

「え、選べるんですか!？」

「一応どっちがいいか聞こうと思って。ちゃんとパーソナルスペースも確保できるし、必要ならダブルベッドとかもつけた2人用のスペースも設置するよ。」

「M4、何をボサっとしているの。さっさとルームシェアするわよ。」

「みんなで一緒に部屋!? 楽しそう! それがいい!!」

「ルームシェアか……実はちよつと懂れてたんだよな。」

ルームシェアに2人用のスペースがあると聞いてAR15が急に乗り気になった。さつきまで「何言ってるの?」みたいな顔だったのに。それに続いてSOPMODとM16もルームシェアに乗り気になり、結局多数決でルームシェアに決まった。

「ダブルベッドの話したただけなのに・・・コレは『アレ』かな？」

「ナターシャ・・・そういうとこだよ。」

V e c t o r の苦言もまあ理解できる。ちよつとふぎけ過ぎたかなと反省しながら A R 小隊を希望の部屋に連れて行く。天然のタラシは危ういモノだが、養殖物のタラシはもつと危うい存在だと V e c t o r はナターシャとの 10 年ぐらいで把握しているのだ。

「ここがルームシェアタイプのお部屋、まだ質素だけどその内豪華にするからね？」

「ほ、ホントに一緒の部屋で暮らすんですね。」

「わたし達は姉妹だろ？今更部屋が一緒だからって何も変わらないさ。」

「見て見て！ホントにダブルベッドだよ！」

「M4、あのダブルベッドつきのスペースは私と貴女のスペースよ。いいわね？」

(ダブルベッドにカーテンとか装備しようかな) ニツコリ

賑やかな A R 小隊を眺めているとついつい悪い癖が出てしまう。4 人とも一緒にいられて嬉しそうだなとか考えていたのに、姉妹愛とか恋愛とかが絡むと余計な横槍を入れたがる癖は昔から周りに指摘されてきた。直す気は無いけど。

(V e c t o r にも直せって言われてたっけな・・・)

「指揮官さま、どうかしましたか？」

「ん、大丈夫だよ。それよりも、荷物置いたらご飯食べよう？」

「わーいご飯ご飯！」

「指揮官、ジャックダニエルはあるか!？」

みんなを連れて食堂に向かう最中も楽しいお喋りは途切れなかった。忙しいけど賑やかなこの基地にまた素敵な住人が増えるのは喜ばしい事だし、ナターシャはその騒がしさが面白くて仕方がない。

(昔みたいだなあ・・・)

「昔の事思い出してるでしょ。心の声、出てるよ。」

「あ、バレた?」

AR小隊が気付かないような声量でナターシャとVectorがヒソヒソ話している。別に聞かれて困るような会話じゃないが、せっかくの楽しい時間がシラける可能性があるからには聞かれたくない。あんまり話してて楽しい話じゃないし。

「ホラ、今日も食堂は大人気。」

「M4、ちょうど4人掛けの席が空いてるわ。」

「・・・AR-15、お前さつきからM4のことばつかだな。」

AR-15がやたらにM4と一緒にしろうとしてくるが、ナターシャはその理由に感づいてしまった。その上でちよつと弄って遊ぼうとか考えだすからタチが悪い・・・A

R-15の未来はどうなることやら。

「見て見て！クリスマスツリー!!」

「ちよ!?! SOPMOD!?! そんなにお皿に盛って食べれるんですか!?!」

「相変わらず盛りたがるな・・・食事も、アタツチメントも。」

「M4、口周りが汚れてるわ。」フキフキ

「え? あ、ううううう・・・」

(仲良いなあ・・・)

姉妹揃って食卓を囲む、この世界では失われつつあるその光景が見れるだけでもナターシャ的には目の保養(M4が赤くなつて俯いてるのも)になる。∴別に百合カップル至上主義ではない、ただ可愛い子と戯れるのが楽しいだけだ。

「早く食べなよ、ご飯冷めるよ?」

「そうだった。はい、あーん。」

「・・・・・・」↑無言であーんに応じる

周りの空気が「ヤベーものを見た」ような空気になるのを感じる。当然だろう。2人が急に惚気カップルのようにイチャつきだした上に、ナターシャはまだしもVectorはさつきまでイチャつききそうな雰囲気はまるで無かった。それがいきなり「あーん」をやりだしたら誰だって驚く。

「美味しい?」

「………美味しい。」

こんな甘々空間を作られて周りはもう満腹になった。これ以上変なモン食わせなと無言で訴えかける者もいるが、悲しきかなナターシヤはその訴えを知った上で更に甘々にしたがる人物なのだ。そのうちあまりにも甘々すぎる空間に「やめろ」と抗議が入ることになるが、大した意味は無かった。

《後日……》

「ナターシヤ……もうあーんってヤツやめて……」

「え?」

「……え?」

こんな会話が繰り返されたらしい。

資料① A R 小隊について

A R 小隊長 M 4 A 1

特殊な人形達で構成されたA R 小隊の隊長であり、彼女達が住む部屋の室長的存在でもある。控えめで優柔不断なため隊長に向いていないとA R—15に言われてしまう。姉であるM 16の酒好きっぷりにはいつも悩まされており、後にナターシャから教わった解決方法を試して大惨事を招いてしまう。戦術人形でありながら夢を見ることができ、何故か変な夢を見がち。主にどつかその辺の銀河の夢とか。周りの皆に大事にされてきたが、自分にそんな価値があるのかと悩み中。

「指揮官さま・・・私、頑張ります！」

M 4 S O P M O D I I

見た目は遊びたい盛りの子供だが、実は鉄血の人形を笑顔で解体するサイコパス。A R 小隊の皆をとても好いており、それ故に仲間を傷つけたり侮辱したりする相手には容赦しない。鉄血の人形からくり抜いた目玉をコレクションしておりベッドの下に大量に保管しているが、それ以外にも宝物はある。ナターシャに頭を撫でてもらうのが好き。抱っこも膝枕も好き。ナターシャが出張などでいなくなると見るからに寂しがり、

帰ってくるや弾丸のようにハグしてもらいに行く。

「見て見て指揮官！新しいコレクションだよ！」

ST AR-15

やたらにM4A1のことを気にかけるが、M4本人のことは辛口評価。部屋にダブルベッドがつくと知るや否やM4と寝ようとし、周りが止めなかつたため一緒に寝ることになった。M4のことを誰よりも好んでいるが口から出るのは辛辣なコメントばかり。しかし、ナターシャにはその本心を見抜かれている。元々英雄願望が強く特別な存在でありたいという望みを持っているが、周りに振り回されつばなしの現実に悩まされている。

「指揮官、あまり私を失望させないでください。」

M16A1

M4A1の姉であり、作戦中もプライベートでも頼れる姉貴だが酒絡みの問題が多い。M4のことを大切に思っているが同時に天敵でもあり、泣き落としや反抗期に入つたM4には敵わない。小隊の4人でルームシェアするのに憧れており、R03地区に来て早速それが叶つたことで満足げ。因みにAR小隊がこの地区に来ることになったのは、M16が「ある人形」に配属先を相談したところ「R03地区にいるナターシャ・E・ロツクハートを頼れ」という旨の話をされたから。

「指揮官、あんま妹たちに厳しくするなよ？」

「作者談」基本的に原作に忠実にしようとな努力したが、案の定独自のキャラづけに走ってしまった。M16に進言した人形・・・いったいどこの誰なんだろうねえ？

レッツ、お悩み相談 [M4の場合]

ナターシヤ・E・ロックハートという人は大変な変わり者である。人形達のことを大好きで彼女達を蔑ろにする奴らが大嫌いであり、特に人類人権団体の連中は心底嫌いで中指を突き立てながらロケランを撃ち込むぐらいに嫌いである。そんな彼女がR03地区で新たに始めたのが「人形向けのお悩み相談室」である。今回はその相談室に来た最初のお客様の話を少し……

「指揮官さま……AR―15が怖いんです。」

「怖いって、具体的にはどんな感じですか？」

ナターシヤが指揮官としての業務とは別に始めた「お悩み相談室」、人形達のメンタルケアを目的として始めたこの活動の最初の相手はM4A1だった。話を聞くに同じ部屋で暮らしているAR―15との間に何かあったみたいだが……

「ホラ……一言で怖いって言ってもカツアゲするヤンキーみたいな物理的な恐怖と、この人ヤバイ奴かもって感じの精神的な恐怖の2つがあるじゃん。」

「え、えつと……精神的な方です。AR―15はいつも私に対して辛口なんですけど、急に甘やかしてくれたり……何よりも怖いのが、寝る時なんです。」

「寝る時が怖いつてどういう事？」

「・・・裸なんです。」

「あゝ・・・」

どうやらA R—15は全裸で寝るタイプの人のようだ。この基地に来て一緒のベッドで寝るようになってから知ったらしく、そのような習慣が無いM4からしたら変人に見えないだろう。それ以外にも色々とおかしく思っているようで、M4の精神を擦り減らしている模様。

「寝てる時も抱いてきたりして・・・い、嫌じゃないんですけどちよつと怖くて・・・」
「あーつと・・・まあ、偶に裸で寝る人いるけど。（寝てる時に無意識に好きな相手を愛でちゃうとかあるのかな・・・？）多分A R—15の『嫌い』は『好き』って意味だろうから、ホントはただ好いてくれてるだけって思った方が良いよ。」

「嫌いが好き・・・？そんな事あるんですか？」

「ツンデレってヤツだよ。」

因みにM4はツンデレの意味をよくわかっておらず、ナターシャの言葉を聞いても疑問符が拭えない様子だ。その一方でナターシャの方は「A R—15と不器用にイチャラブしてるところを物陰から眺めてやるぞグへへ」みたいな顔になっている。ハッキリ言つて気持ち悪い。

「とりあえず先ずは受け入れてあげなきゃ、このまま怯えながら寝るの嫌でしょ？！
そのこと抱かれた時に抱き返してみるとか・・・」

(だ、抱き返して・・・!?)

以下、M4の想像。

「ううん・・・むにゃ・・・」ダキッ

(き、来た！し、指揮官さまに言われたように・・・ギューツ!!)ダキカエシッ

「M4お、好きい・・・♡」サラニダキカエシッ

「え、はうう・・・♡」サラニサラニダキカエシッ

朝になるまで抱き合つて体を絡ませながら愛を囁きあつた・・・以上、想像終わり。

「・・・だ、ダメです！そんなえっちなのはダメです！」

(エロい想像しちゃったかな？えっちつて言い方かわいいゾ。)

抱き合つて寝るのは初心なM4には刺激が強すぎたようだ。

「も、もつと穏便に・・・普通の方法で何とかならないんですか・・・？」

「穏便に済ますなら・・・いつそM4も裸で寝るとか？」

「それもダメです！何でも私も脱いだら解決すると思ってるんですか!?!」

お悩み相談はどこへやら、ただナターシャの愛欲が暴走するだけの時間になってしまった。しかもM4のリアクションがいちいち大きいせいで調子こいて更にボケ始め、

完全にただの漫才コンビになっている。

「で、気を取り直して・・・言いたいことがあるなら、ちゃんと本人に向かって言ってみてごらん。ここで喚いても何も変わらないからさ。」

「喚かせてるのは誰だと思ってるんですかあ・・・」

M4の嘆きもナターシャの（都合の良すぎる）耳には届かず、問題の夜を待つのみ。

《その日の晩・・・》

M4は落ち着かない様子だ。ナターシャに教わったとおりAR―15に向かって直訴するつもりだが、もし受け入れられなかったら・・・なんて考えて中々言い出せずにいる。そう、隣にAR―15がいるのだ。裸で。件の存在を前にして固まってしまっているのだ。

「M4、落ち着かないみたいね。」

「え？い、いや別にそんな・・・」

「私と一緒になの嫌？」

「ち、違う・・・」

急に話しかけられて思わず視線を逸らしてしまい、自分と一緒になのが嫌なのかと答えずらい問いを投げられた。M4とてAR―15の事が嫌いなわけではなく、むしろ家族として愛している。しかし今彼女に向けられているのは紛れもない恋愛であり、そもそ

も同性での恋愛の是非もわからない彼女には対処しようがない。

「・・・貴女のこと（家族として）好きです。でも・・・やっぱ裸で寝るのはどうかと思います・・・」

「M4・・・」

やっと言えた。正直なんで裸云々でこんなドラマチック風味な雰囲気になるのか不明だが、当人たちにとっては大事な話だからそつとしておこう。

「わかったわ・・・私も貴女のこと（恋人として）好きだもの。少しぐらい言うこと聞いてあげる・・・」ダキッ

「AR—15・・・」ダキカエシッ

結局抱き合うことになったが、喧嘩もなく割と穏便に済んだだけかもしれない。致命的なすれ違いを抱えている事以外は。因みに・・・

「・・・なあSOP。」

「何?」

「アイツらは何なんだろうな・・・」

「・・・?」

M16とSOPMOD IIも同じ部屋にいる以上今の会話は丸聞こえであり、2人が今まさに抱き合っているのがわかってしまっている。指揮官のご好意(?)で取り付け

られたカーテン越しに、2人は件のベッドを見つめている。SOPはわかって無いけど。

《翌日・・・》

「指揮官さま、昨日はありがとうございました！」

「その口ぶりだと、AR―15とも上手くいったみたいだね。」

「はい、おかげで上手く行きました！」

「そうそう、その顔だよ。女の子は笑顔が1番ってね！」

M4は今までにない満面の笑みでナターシャにお礼を言っていた。おかげで少しギクシャクしていた関係が良くなったのだから当然と言えば当然だが、ここまで笑顔なM4も珍しいだろう。

「これからもよろしく願います、指揮官！」

「よろしくねー。(美少女の笑顔、プライスレス!)・・・写真に収めたかったなー。」

彼女はこれからもナターシャを頼ることになるだろう・・・その変態性を知らないまま。

一杯のコーヒー

全ての成功している女性の背後には、相当な量のコーヒーがある。こんな言葉が存在するぐらいコーヒーは世界中で愛されてきた。それはR03地区グリフィン基地においても例外ではなく、コーヒーと休息とお喋りを楽しむ人形達のためにカフェが開かれた。食事なら食堂を使えばいいのだが、ちよつとした時間を楽しむためにここを訪れる人形は多い。当然、指揮官だつてこのちよつとした時間のためにここに来るのだ。

「スプリング、コーヒーお願い。」

「ふふつ、かしこまりました。」

カフェのカウンター席にはナターシャ人だけであり、彼女の注文に応えた「スプリングフィールド」が真心を込めてコーヒーを淹れる。慎重かつ手際良く全ての工程を済ませ、お得意のホットコーヒーを提供する。

「・・・うん、美味しい。」

「ありがとうございます。」

「カフェをやりたいって志願した時は驚いたけど、言うだけの事あるね。」

「いえいえ・・・」

ナターシャの褒め言葉をスプリングは謙虚に受ける。基本的に彼女はこういう存在なのだろう。自分が必要とされ、人の役に立てる事に喜びを覚える。それが今回はカフェの形になっただけだ。

「一杯のコーヒーは人生を左右するって言うよ……今私が勝手に言ったけど。」

「指揮官さまつたら、そういうお話が好きなんですネ。」

「ほんの一瞬のお喋りが人生を変えるんだよ……これはホントに。」

ナターシャは放っておくと永遠にお喋りを止めない。いつもは周囲の人形（主にVe ctor）がいい感じのタイピングでブレーキを踏んでくれるが、今はスプリングしかないのをいい事に好き放題お喋りに付き合わせてる。

「コーヒーを発明した人って偉人の域超えてるよね。こんな苦味がある飲み物を砂糖とミルクもなしに飲んで、美味しいって思ったから流行ったんだろうけど。一体どこの誰が発明したんだろう……」

もはやナターシャはコーヒーから連想できる話を永遠に喋り続けるだけのジュークボックス人間になってしまった。よほどこのカフェが気に入ったのか、コーヒーを2杯3杯と飲みながら合間に楽しくお喋りする。

「私にとつてお喋りは皆との時間を楽しむ最良の手段なんだよ、人形は戦場に立つて戦うだけの存在じゃない。もっと平和に生きたってだれも怒ったりしない。いつ消えて

もおかしくないからこそ、今の瞬間を楽しんで。人間らしく生きたつていいんだよ……
ゴメンね、湿っぽい話になっちゃったね。」

「いえ、いい話が聞けました……どうして指揮官さまが皆に好かれるのか、わかった気がします。」

ああ、だからこの人は皆に好かれるんだろう。人形は復活できる、死んでも帰つてこられるからと切り捨ててる指揮官が多い中で、彼女は人形達を人間のように扱つてくれる。その愛情と優しさが人形達の光となるのだろう。

「……ところで、それで何杯めかわかつてますか？」

「たしか……6?」

「8です。」

おおう、そんなに。と思ひながら8杯めのコーヒーを飲み干す。普通そんなにたくさん飲む奴はいないが、ついお喋りに夢中になつてしまったナターシャはいつのまにかもの凄いな数のコーヒーを飲んでしまったようだ。

「そんなにたくさん飲んだら、後で大変になりますよ。」

「大丈夫、我慢しながらお仕事するの得意だから。」

全然大丈夫じゃねえ、と誰かが言い出しそうな会話だがいかんせん此処にはスプリングしかない。誰もナターシャにブレーキをかけてくれない以上この暴走は止まらず、

もはや客と言うよりただの厄介者だ。コーヒーを注文するだけまだマシだけど。

「そういえば……指揮官さまは何故『ドクター』って呼ばれるんですか？」

「ああ、それね……昔から人形達の面倒見るのが大好きでね、とうとう自分の所にいる子じゃ飽き足らず他所の子まで面倒見始めたの。最初は他所の基地の指揮官が口出しすんなって追い払われたけど、人形達が街中にいる時を狙って話しかけてたら気に入られたの。その子達からの推薦もあつて、あれよあれよと言う間に『ドクター・ロックハート』なんて呼ばれるようになったの。」

「なるほど、それで……」

「でも恋仲になった子は一人もないよ？たまにいい感じになったりするけど、その度に Vector にお尻叩かれて止められるけど……」

いつのまにか惚気話みたいな話になってしまった。ナターシャの浮気性(?)と変態性には Vector も悩まされてきたが、今まさにスプリングがその毒牙にかかろうとしている。

「最近はお医者さんって呼ばれなくなってきたけど、「上」からの目線じゃ私は完全に心理療法士もどき。おかげでただの指揮官じゃ会えない子にも会えたけど、立場が特殊すぎ世渡りには苦勞するんだよ。」

「私達も、ただの人形じゃ会えない指揮官に出会えました。ここの人形はみんな幸せ者

です。」

「ふふつ、ありがとね。スプリングもそんな口説き文句言うんだね。」

「え!?!いや、その・・・」

ただ感謝を述べたはずが口説き文句と捉えられ、ナターシャの真剣な（ように見える）表情と合わさって本当に口説かれてると思ってるのかと言いたくなってしまう。実際ナターシャの脳内には「私を持ち上げる∥口説き文句」という謎の方程式が根付いている。何を言っているんだお前は。

「コーヒーありがとね！後口説きの返事はまた明日！」

「えええええ!?!ちよつと指揮官さまーッ!!」

今日もR03基地は平和だ。

会話に混ざりたい彼女

WA2000という戦術人形がいる。彼女は非常に優秀なスナイパーであり、極めて高い実力を持ったために多くの指揮官が彼女の恩恵を受けている。当然R03基地にも彼女がいるのだが、1つだけ困った事がある。

「……………」ソワソワ

WA2000が物陰から見ているのは、この基地の指揮官ナターシャと副官のVectorが廊下で談笑している他愛もない光景。

「だからねVector、このカタログに掲載されてるスキンはいつだって取り寄せられるの。学生服からミニスカメイドまでね。だから貴女は欲しいスキンを選ぶだけでいいの。」

「ナターシャ、下心見えてるよ。」

「特にこの水着スキンなんて最&高、誰かが来てるのを想像しただけで……おつと鼻血が。」

「ナターシャ、そういうとこだよ。」

いや、他愛もないとは到底言い難い内容だった。覗き見ているWA2000も抗議を

申し出たい気分だが、そのための1歩も1声も出せない。そう、困った事とは、他人に話しかけられないのだ。向こうから話しかけられたら大丈夫なのだが、自分から話しかける・・・特に会話中の相手に話しかけるのが極端に苦手なのだ。

「・・・わーちゃんも混ざる?」

「わーちゃんって言うな!!」

「いたんだ・・・」

物陰から飛び出して来て開口一番に放ったのは、自分の渾名への反発だった。ナターシャ曰く、「本当は渾名つけられて嬉しいけど、照れ隠しで嫌がつてるんだよね。生ツンデレおいしいです。」らしい。

「混ざりたいオーラ全開だったくせにく、かまっつてちゃんなんだから・・・痛い痛い痛い!! Vector! 耳取れるって!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・↑無言でナターシャの耳を捻る

「いやいやいやいや違うんですよ!! 部下とのコミュニケーションは指揮官として必須だからやつてるだけで別に浮気やセクハラじゃあああああ!!」

Vectorの強烈な平手打ちがナターシャの尻に炸裂し、彼女はその場に崩れ落ちた。部下に尻を叩かれて悶絶する姿は威厳の欠片も無いが、元々変態なことでは有名な彼女に威厳がある時など無い。呆れたVectorは帰ってしまった。

「なんで今のを受けてピンピンしてるのよ……」

「くう……指揮官になって数年、その間Victorにお尻ペンペンされること182回！内2回は30分弱の間に100回叩かれ、「次はみんなが見てる前でお尻ペンペンだから」と脅された記録を持つ私ならこの程度の痛み……あく痛い……」

（何でここに来ちゃったんだろう……）

「今何でここに来ちゃったんだろうって思ったでしょ？でもここなら充分な戦果と充実した私生活の両立が出来るし、職場恋愛も自由だし……」

「私は殺しのために生まれてきたの、余計なお世話よ！」

（この表情……これは「自分の事を考えてくれて嬉しい」と「素直になれない自分への嫌悪感」が1:9ぐらいのブレンド……微かにだがデレは始まっている！今追撃せねば明日は無い！）

お決まりのフレーズを言い放ったWA2000の表情を読んだナターシャの思考は、ありえない程にゲスだった。よく今まで生きてられたなと思うぐらいに乙女の心を弄び、ドクターと呼ばれる程の手腕を悪用しただした彼女を止められる者などいない。

「特におすすめはスプリングのカフェだね、ムチムチでエチエチな美女が淹れたコーヒーを飲めるのはあそこぐらい……他にも宿舎の一角を改装して新しい施設作る予定だし……」

「ま、まあ……そこまで言うんなら仕方なく行つてあげるけど、ただアンタがかわいそうで見られないから行つてあげるだけだからね！」

（まさに純ツンデレ……一切の無駄を取り払った芸術的な美……いただきました。）

色欲に染まりきったナターシャはもはや人間以下のゲスに成り下がりを、WA2000のデレを拝みたいだけのクズと化した。それでも真剣に彼女が楽しめるような施設を作ろうとしている姿勢には多少感心するが、そこまでする理由の大半が下心なせいでゴミクズにしか見えないが。

「中には自分は人形だからつて四六時中働こうとする子もいるからね、ちゃんと休憩できるところ作つてあげなきゃならないの。」

「わ、私はそんな事ないわ。そんな手のかかる問題児になつた記憶無いもの。」

「ふふっ……」

「な・に・が！ そんなにおかしいの!!」

こうしてナターシャの一挙手一投足に律儀に反応してる時点で彼女の毒牙にかかつてしまっているのだが、それに気づかず相手をしてしまっているWA2000が手籠にされるのは時間の問題だろう。今の笑みは「口では散々言つても、ブンブン振れる犬の尻尾を幻視するような態度で帰りを迎えてくれる彼女」みたいな姿が想像できてしまったが故の笑みである。

「いや・・・ね？ただ、早く来ないかなって。」

「・・・何を想像したの。」

もうこれ以上相手をしてもし疲れるだけだと察せるはずなのに、メンタルが破損しているのか気が済むまで付き合ってしまったている。見えている地雷を踏んでいるあたり、いかに彼女が追い詰められているかがわかる。

「・・・・・・・・ホラね、最初さえ入れれば人と話すなんて簡単だよ？」

(え？あ・・・)

彼女は自分自身の変化に気づいた。最初は人に話しかけるのさえ出来なかったのに、今は満足に会話できている。気づかぬ内にナターシャの策謀に嵌められていたのだ。最初はナターシャの方から話しかけ、相手が会話を続けやすい出だしを作る。その後で何かしらの小トラブル(今回は Vector によるお仕置き)を起こして「自分は人と話せない」という自己認識から意識を逸らさせ、後は会話が途切れないように話を続ければ完了。つつけんどんでコミュ症なわーちゃんを変えてあげるならこれで充分だ。

「もっとお喋りしたいならお悩み相談にいらっしやい。」

「・・・わかったわよ、悩んだ時だけよ。」

「おっ、わーちゃんがデレた。」

「わーちゃん言うなーッ!!」

WA2000が勢いよく尚且つ精密にナターシヤを蹴った脚は、的確に彼女の股間を直撃した。凄まじい激痛に悶絶し、股間を手で覆ったまま崩れ落ちる。女だろうとソコは痛い。

「我々の業界ではご褒美です・・・」

変態発言も聞き流された。その後、本当に何でこんな基地に来てしまったのだろうか
と嘆くわーちゃんの姿が目撃されたとか。

若さなんて無かった

グリフィンの基地は抱える人形の数や戦略的な存在意義によってその規模が決まる。R03地区の基地はあのS09地区あたりと比べれば小さい方だ。それでも必要な物資は決して少なくはなく、いざという時に備えて備蓄もしている以上倉庫は常に圧迫されている。後方幕僚だけでは整理しきれないため、度々指揮官自ら倉庫整理に乗り出すのだ。

「あく……腰にくる。」

「おぬし、若さはどこに置いてきたのじゃ……」

「もう若さなんて持つてる歳じゃないんだよナガン……」

現在、R03基地の倉庫ではナターシャ自ら倉庫整理を行なっている。本来ならこのような雑事は誰かに任せてしまえばいいのだが、いかんせんカーリーナは他の仕事で手一杯なため、しょうがないからとナターシャがやる事になったのだ。で、たまたまその様を見つけたM1895……もといナガンおばあちゃんの助力で整理を進めているのである。

「……後はコレだ。この弾薬の塊だ。」

見るからに重そうな弾薬箱を見つけ、その重量を警戒しながら慎重に持ち上げる。何とか持ち上げる事に成功し、後は置き場を移すだけだった。その油断が悲劇を招いた。ゴリツ!!

「あぎやツ!？」

明らかにアカン音と同時にナターシャの動きが停止した。持ち上げた箱を元の場所に戻して、その直後力なく倒れ込んだ。

「し、指揮官……どうしたのじゃ？」

「こ……腰、やった……」

「ちよ!?だ、誰かー! 指揮官が! 指揮官が腰をやったんじゃー!」

不意打ちすぎた魔女の一撃にナターシャは呆気なく撃沈、助けをよぶナガンの声を聞いて駆けつけたVectorに抱えられて医療室まで運ばれてった。

「ぎっくり腰かあ、久しぶりこの感覚……痛い。」

「2、3日安静にしてたらその後は良くなるから、大人しくしてて。」

「おぬし詳しいのう。」

「前にもナターシャが腰痛めた事あったからね。あの時は大騒ぎだったけど。」

Vectorが言うにはナターシャはここに来る前からグリフィンの指揮官をやっていたらしい。ただその時の話は中々話してくれないため、Vectorの口から語

られるのみである。ぎっくり腰の件もその時なんだとか。

「Victor……その話はやめようか、古傷が痛む……腰も痛む……」

「昔から好き勝手やってきた罰よ。」

「うああああ……」

「天罰じゃったか……じゃあ仕方ないのう。」

ナターシャの「人形遊び」の後始末が多大なストレスを与えていたのか、今日のVictorはいつもに増して辛辣だった。人の話したくない過去を勝手に掘り下げるドSと化した彼女は止まらず、古傷という古傷を片っ端から開いて精神的に痛めつける攻撃がナターシャを襲う。

「……鉄血と戦った日の夜にはグリフィン本部の治安維持部隊に追っかけられる指揮官なんて他にいる？ 運良く顔割れなかったからギリギリ助かったけど、顔割れてたらアウトだったからね。他にもここ数年で人類人権団体の過激派が代表他数名の急死でザワついてるし、仕事放り出してどこかの特殊部隊と連絡とってるみたいだし……ナターシャの悪行、数えたらキリないよ。」

「サラッと人類人権団体の代表死んどったけど……おぬし指揮官が殺したと思つとるんか？」

「他にいないでしょ。」

「よーしこの話はまた今度にしよう、昔話を始めたら色々と積もる話も出てくるしね。Vectorわかった？ナガンもね？」

余程探られたくない過去なのか、無理矢理にでも終わらせにかかったが大した効果は無さそうだ。その証拠に多少ヒソヒソ話をした後、Vectorはイタズラっ子みtainな笑みを浮かべながらベッドに近づいて来るし、ナガンはいつのまにかベッドに乗っかっていった。

「な、なんでしようか・・・？」

「・・・お仕置き。」ツンツ

「ひゃう!?わ、脇腹を突つつかないあ!!」

「ほれほれー、ここか？ここが弱いんか？」ツンツ

「ナガンまでえ!?ひやぎい!?腰痛ア!」

2人の指が脇腹を突つつか度に体がビクンと痙攣し、激しい動きのせいで骨が割れそうな程の激痛が腰を襲う。なんとか2人のお仕置きを辞めさせようと試みるも、立つ事もままならない今の体ではただ身を任せる事しかできない。

(ああん・・・腰無理イ、死ぬう・・・)

「・・・これぐらいで許してあげる。でも、また治安維持部隊に連行されかけたりしたら、お仕置きだからね？」

「ひゃい……」

(力関係が透けて見えるのう……)

この日、ナガンは一つ学んだ。R03基地の実質的なトップはVectorだという事を……

《その夜……》

「……痛い。」

夜になってから腰の痛みが悪化し、寝つけない程執拗な痛みに襲われて苦しむ羽目になった。半分以上は自分のせいだが……隣にいる相棒はナターシャと違ってよく寝ている。

「zzz……」

「みんなは良いなあ、腰痛くてもパツと直せるし。」

普段なら一緒に寝たりはしないのだが、今日ばかりは特別だ。そもそもVectorのせいで腰悪化した節あるし。

「あゝ、また痛くなってきた……」

急に感じた体の老化に涙が出そうになる。20代前半あたりの頃は多少無理してもすぐに治ったのだが、今や弾薬の塊を運ぼうとしただけでぎっくり腰に襲われて部下に虐められる。泣きたい。

「ママ．．．元気ですか．．．？ナターシャは今腰痛で死にそうです．．．」

遠い、遠い空、母に届くと信じて呟く。腰痛の痛みと部下に虐められる悲しみを：

《翌朝．．．》

「もう動いて大丈夫なの？」

「座つてればなんとかね．．．」

一晩明けてようやく動けるようになったナターシャ、これで通常の業務ができるようになったのだが．．．いかんせんいつ腰の痛みに襲われるかわからない。不用意に動く．．．

「いだあ!?痛い!死ぬう!!助けてつてばあ!」

「はいはい．．．」

このように、急な激痛で動けなくなるためしばらくはVector同伴で仕事していたそう。

医療前線

「あら、指揮官様！お出掛けですか？」

「おやカリンちゃん、今日はどっちかと言うとお出掛けよりもお仕事かな。地区内の病院でお仕事なの。」

「なるほど・・・ドクター・ロックハートのお仕事ですね！」

ナターシャ・E・ロックハートのもう一つの仕事、（無免）心理療法士『ドクター・ロックハート』としての仕事である。人形専門であり、決して人間はケアしてくれない（一部除く）。今日は地区内の病院に勤務している人形のケアに行くのである。

「行つてきまーす。」

「行つてらつしやいませー！」

カリーナに見送られて基地を出る、基本的に出張時は1人の事が多く、行き先の治安が最悪だったり人類人権団体が勢力を伸ばしていたりする場合のみ護衛とブレーキ役としてVectorが同行する。今回は治安も良好だし病院自体が人形を雇うぐらいには人形への理解があるから1人でも問題ない、しっかりケアしておけば今後も安心できるだろう。

「つーいたついたつと、失礼しまーす。」

病院の正面入り口の扉を開き、受付のスタッフに用件を話す。既に話は通っておりスタッフの案内で空き部屋に入り、メンタルケアをする相手がやってくるまで待つ。部屋には花束や果物が入っていたであろう籠が置かれており、ここが病院である事を考えることや怖い気がする。

コンコン

「・・・おや、今日のご予約さんかな？」

「失礼します、ドクターさん。G3と申します。」

空き部屋のドアを開けて入ってきた彼女、G3は見るからに美人で上品で疲れていない。肉体的にもそうだが、精神的にもかなり寝れており目の下にうっすら隈も見えない。余程過酷な労働環境で働いていたのだろう。

「で、今日はどのような用件で？」

「はい・・・最近急患の数が急増していて、それで疲れているんです。身も心も。」
「なるほどね・・・こんな時代じゃ、これ程設備が充実した病院も珍しいからね。」

第三次世界大戦以降、世界的に疫病が蔓延し医療体制は完全に崩壊している。そんな時代に優秀な医者と高性能な設備が揃った病院は貴重であり、地区内外から患者が押し寄せて病院が混乱する光景は想像に難くない。

「人生に疲れるのは誰しも一度はあるからね、そこから立ち直れるか倒れ伏すかは人それぞれ。まずはよく考えてごらん？自分を本当に疲れさせているのは何で、自分はもうしたいのか。」

「私が、どうしたいか……」

目を閉じてよく考えてみる。自分を疲れさせているのは絶え間なくやって来る急患への対処、それはすぐにわかった。でも自分がどうしたいのかは何もわからない。ここで働く事は自分の誇りだし、逃げ出したとは思わなかった。だがここでの過酷な労働が少しずつ自分をむしばんでいるのも事実であり、そこから脱却したい気持ちもある。考えれば考える程何もわからず、結論を出すのがズルズルと先延ばしになってしまう。

「ごめんなさい……わからないです。」

「そっか、わかんないかぁ……まだ時間あるね、ちよつと散歩しようか。」

ナターシャに連れられて病院内を散歩するG3。窓から吹き込んでくる風にあたれば考えすぎている頭も落ち着き、自然と心が癒されていく。

「昔の人が言ってたよ、『このヤク漬けなヒッピーの掃き溜めみたいな世界には、娯楽と医療が必要だ!』ってね。その点で言えば、この地区は比較的恵まれてるよ。だって朝起きてから眠るまで弾丸と砲弾と弾道ミサイルが絶え間なく飛んでくる時代があったのに、今じゃまるで楽園。こんなに安全が確保されてる場所はそうそう無いからね。人

形だつて平和な生き方ができるわけだし。」

「はい、私も最初は戦術人形になつて戦場で戦うのを望んでいました。でも今は……ここにいられて良かったと思います。」

「誰だつて好き好んで敵地に突っ込んでいくわけじゃないからね。みんな自分が生きたいように生きていいのに、それが出来ない環境にいる事も多いし。」

2人が病院内を散歩していた時、キャリアーつきのベッドに乗せられた患者を急いで運ぶ医者と看護師が2人の脇を通り過ぎた。

「あの人、人類人権団体の人なんです。ずっと入院してて、事故の大怪我で意識も無いなんてかわいそう……」

（はえー、めっちゃ死にかけだわ。ワロスワロス。）

「あんな状態の人が多くて、私達は中々休めないんです……」

（帰りに救命器具外してから帰ろうかな……）

「あ、あの……ドクターさん？」

「うん？」

「あ、いえ……大丈夫です。」

見てはいけない物を見てしまった気がする。明らかに人間の目をしていなかったし、その直後に普通の笑顔に戻るのもピエロを見ているようで気味がわるい。アレは人間

「間違いだ、今日のうちに忘れてしまおう・・・G3はそう思う事にした。」

「とにかく、G3ちゃんはこのを離れられないんでしょ？本当は私の基地に来てほしいところだけど、それは無理そうだね。」

「ドクターさん、そうなんです。私はここを離れたくないんです。やっとわかりました。自分を必要としてくれる人達の期待に応えたくて、少しぐらい辛くてもそれを乗り越えて誰かの力になりたいんです！」

「よし、よく言った！自分で考えて導き出した答えが大事なんだよね！」

戦術人形のメンタルには限界がある。人間は生まれてから死ぬまでの間に心身を発達させて熟成させるが、人形のAIにはその成長が起きる余地が少ないのだ。それはあまりにも理不尽すぎる。そこにちよいと刺激を与えて、彼女らの心が成長できるようにするのがドクター・ロックハートのお仕事だ。ちよつとメンタルケアの内容が雑すぎる気がするが、所詮彼女は藪医者同然なので当たり前だろう。

「おつとそろそろ時間だね、じゃあまた困った事があつたら電話しな。いつでも相談のるからね。」

「はい！今日はありがとうございました！」

(いい笑顔だ・・・いつか大怪我した時はここに来よ。)

軽い足取りで病院を後にし、基地に戻る途中で昔を思い出した。あの頃の部下は手の

かかる子ばかりだったが、それが堪らなく愛おしかった。彼女達に石や発煙筒を投げつける奴らと喧嘩したこともあった。

「いつからだっけ……こんなにあの子達が大切になったの。」

ワンコMOD II

人形にもいくらかパターンがある。特に指揮官に対する態度は様々なパターンが確認されているが、中には突き抜けた愛情表現をする子もいる。

「なあM4・・・お前、アレをどう思う？」

M16が言うアレとは、基地の玄関でソワソワしているSOPMODの事である。いつもの彼女は元気いっぱい暴れ回り、一箇所に留まるなんて出来やしない。そのはずだったのだが・・・

「待つて・・・ますね。犬みたいに。」

「ああ・・・私もあんな姿は見た事がない。一体何が・・・」

その印象はどこへやら、今の彼女は飼い主の帰りを待つ犬のように玄関に居座っている。同じ小隊の仲間さえ困惑するような異変に原因は、案外簡単だった。

「ただいまー。」

病院での仕事を終えたナターシャが帰って来た。勿論その場に居合わせたM4とM16はお帰り（なさい）の一言を返すのだが・・・。お帰りなさいよりも早く、ただいまの「た」の時点で駆け出す強者がいた。

「指揮かーん!!」

戦術人形としての性能をフルに発揮したSOPMODは全速力で駆け出し、玄関のドアが空いてナターシャが顔を出した瞬間に飛び込んだ。日大も真つ青な高速タックルで抱きついたので。

「よいしょつと．．．SOPちゃんお腹空いてる？一緒にご飯食べよう？」

しかしナターシャも伊達に「ドクター・ロックハート」と呼ばれていないのだ。出会い頭に日大も真つ青な危険タックルされるのも慣れっこである。その勢いを巧みな足捌きで殺し、動きが止まった一瞬の隙を突いて抱き上げる。ワンコ系の人形はだいたい抱っこされると喜ぶ。でも中にはちよつと違う反応をする子も．．．

「．．．．．／／シユダツ！」

「ありやりや、フラれちゃった。」

抱き上げたのも束の間、ナターシャの腕に収まったSOPMODは急に赤くなつて逃げ出した。恥ずかしかったかな？とか曰うナターシャだが、この手の反応をする場合は十中八九「アレ」である。確信があつて勿体ぶるんだからタチが悪い。

「M4．．．今の反応は一体．．．」

「わかりません．．．SOPMODのあんな顔は一回も見た事が無くて．．．」

隊員にも何もわからない程、この事態は想像を絶する案件なようだ。

《一方その頃……》

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

SOPMODは自分のベッドに転がり、荒ぶる息を整えた。戦場でだつてこんなに息があがつた事はないのに、今の自分に何が起きているのかさっぱりわからない。

「うう……何で？何でこうなるの……？ただ指揮官が帰ってきて嬉しかっただけなのに……」

ただ純粹に遊びたかった。ちよつと体当たりして、かまってもらおうと思つた。でも、抱き上げられるのは予想外だつた。指揮官の顔が目の前にあり、その腕に収まつた途端逃げ出してしまった。

「嫌われちゃつたかな……」

いくら考えるのが苦手な彼女でも、他人に嫌われたかもしれない事ぐらいわかる。指揮官に嫌われた人形がどんな末路を辿るのか、それは全ての人形がわかっている。それ故に中には指揮官に媚を売ったりする者もいる。彼女はそれが苦手なばかりか、更に鉄血人形の亡骸で現代アートを作る趣味が災いして他人に拒絶される事も多々あつた。

「やつと優しい指揮官に会えたのに……」

自分を生み出したペルシカとある人形の勧めで来たこの基地、想像の8倍以上優しい指揮官に喜び、やつと自分を受け入れてくれる指揮官に出会えて嬉しかった。でも、

それは想像以上に彼女を悩ませた。

結局、この日は散々悩んだだけで終わった。

《翌日……》

「うー……どうしよう……」

今日はA R小隊全員で161a bを訪れている。生まれ故郷とも言えるこの場所に
来た理由は簡単で、ベルシカに会うためだ。機密情報の塊であるA R小隊の4人をメン
テナンスできるのは彼女だけであり、そのためにR 03地区の基地に配属されてから
度々此処に通っている。ただ、今日のメンテナンスは少し時間がかかった。周りが話
てる間、SOPMODがずっと上の空だったからだ。

「SOPMOD、ちゃんと聞いている？」

「……ボーン」

A R 15に怒られかけても反応せず、ずっとナターシャのことばかり考えていた。
今の自分じゃ面と向かって話せるわけがないから基地の外にいる現状はありがたいの
だが、少し出かけた程度でこんなに会いたくなるなら側にいたかった。完全に混乱して
思考もまとまらない。

「SOPMOD、大丈夫？どこか調子悪い？」

「ううん……」

調子が悪いと言えば悪いのだが、それは体の不調ではなく心の不調だ。いくらペルシカが1616abきつての天才であろうとも心の病・・・特に恋の病は「ドクター・ロツクハート」の管轄であり、彼女は人形達の心を癒す最適な方法を知っている。少なくとも無意識にそれを実行してしまう程に。

「SOPMOD、お前昨日からそんなだろ。指揮官に抱っこされた時も逃げてたしな。」

M16の言葉も途切れ途切れに聞こえる。

「大丈夫・・・だよ?」

「大丈夫じゃあないだろ。昨日指揮官に抱き抱えられて逃げた時からずっと落ち込みっぱなしだろ。」

「・・・M16、詳しく教えてくれる?」

「昨日さ、指揮官が出張から帰って来た時にSOPMODが体当たりして絡んでたんだよ。それで指揮官が体当たりをいなして抱えたら、それ以来この調子だ。」

さて、これまでに判明している事柄を纏めよう。

- ・ ナターシャに懐く
- ・ 出張からの帰宅を待ち
- ・ 姿が見えた瞬間高速タックル
- ・ 抱き上げられた途端に逃げ出す

・ それ以降落ち込みっぱなし

・ ・ ・ 勘のいい読者の皆様なら、察しがついた事だろう。

(ええ〜・・・コレってまさか・・・)

(アレ、なんですか・・・?)

(いや、でも・・・あのSOPMODに限ってそれは・・・)

(もしかしたらと思ってたが・・・まさか、その通りだったとは・・・)

ペルシカも、M4も、AR-15も、M16も察してしまった。あのSOPMODに限ってそれは無いと思つたが、ここまで揃つてしまつては断言するしかない。

((・・・恋か・・・!))

最早それ以外に可能性は無いだらう。戦場では有名な人形解体趣味のSOPMODがこんなにしおらしくなる理由なんて他に考えられない・・・因みに誰も知らないが、あのナターシャ・E・ロックハートに恋をするというのは恐るべき茨の道なのである。なにせ日頃から他所の人形と遊び、夜は怪しげなクラブに入り浸つているとの噂が流れる程のロクデナシだ。一体何故グリフィンをクビにならないんだらう・・・

「あーつと・・・SOP?」

「ペルシカ・・・?」

「あの・・・頑張つてね。」

こんな何にもならない応援しかできない自分が恨めしい。SOPMODは真剣に悩んでいるのに、いかんせん恋愛経験に乏しいペルシカではなんと行ってあげたらわからない・・・というか、この手の相談事はドクター・ロックハートが受け持つ話だろう。いくら正式には自分の部下じゃないとはいえ、少しぐらい・・・いや、絶賛片思い中の相手に恋愛相談なんてSOPMODの身がもたない。

「とにかく・・・先ずは彼女と話せる状態にならなくちゃか。」

果たしてSOPMODはナターシャに想いを伝えられるのか・・・

続く!!

結局こうなるんだよなあ

結局161abでの検査はほぼ「SOPの初恋を応援し隊」が結成しただけだった。因みに隊員全員が恋愛経験皆無だったため役にはたたなかつた。何の時間だったんだろう……。そして、基地に戻ってくるや否や戦いは始まった。

「うう〜……」

「ナターシャの執務室を前にして、SOPMODIIはずっと扉の前をウロウロしていた。会って話したいし自分の感情を吐露したいが、ドアノブに手を伸ばした途端に気恥ずかしくなつて手を引つ込めてしまう……。そんな事を繰り返す事既に30分が経っている。

「どうしよう〜……どうしよう〜……」

「何と言つて部屋に入るか」を決めあぐね、ずっと迷っている。なんの話題も無しに入るのとは変な気がするし、だからと言つて何か話す事があるのかと聞かれれば特に思いつくものは無い。ならば他の方法でと考えるが彼女の（幼稚な）頭ではロクに閃かない。八方塞がりだ。

ガツチャ「あれ？SOP、どうしたの？」

「ひゃああ!!し、指揮官・・・」

「おやつあるよ、一緒に食べよう?」

「た、た・・・食べる!」

不意打ちで部屋から出て来たナターシャに誘われて、「部屋に入る」という最初の難問は突破した。だが問題は山積みである。

「はい、あーん。」

「・・・／／／↑嬉し恥ずかし

この指揮官、やたらスキンシップが過剰なのだ。SOPが幼児体型なせいで子供の相手をするように扱われている節がある上に、抱っこやあーんなど受け手にとっては嬉し恥ずかし入り混じるやり方で構ってくるのだ。

(ううう・・・恥ずかしい、でも嬉しい・・・でもやっぱり恥ずかしいよお・・・)

「顔赤いよ、大丈夫?」

「だ、大丈夫・・・だよ?」

「はいしよつと。熱は・・・平熱に決まってるか。」

「!?!?!」

!SOPが赤くなっているのに気づくや否や、急に近寄って自分の手で体温を確かめた。まあ人形が発熱などする事は非常に稀、しかもコンピューターウイルスなどによる

外的要因でしか起こり得ない。だから彼女が熱っぽいわけないのだが……本当の理由を察した上でこの対応をとるナターシャはやはり乙女の敵かもしれない。本人曰く、「指揮官という立場上、部下の子達との衝突を避けるためには仕方ないのであるぞ。」との事。

「ちゃんとメンテナンス受けたの？体は大事にしないとダメって私いつも言ってるけど、皆聞く耳持たないんだよ。SOPは……ちゃんと言うこと聞くよね？」

「う、うん！」

「よかつた、近頃の人形は自分はロボットで消耗品も同然だからって言い出す子ばかりなんだよね。『生きている』のに消耗品なんて、馬鹿な話だけだ。」

会話が思い、重すぎる……ついうっかり自分が常日頃思っている事を口にしてしまい、執務室の空気は「今から誰か殺されるんか」というぐらい張り詰めてしまった。しまったな……などと軽い感覚で反省しているナターシャに対し、SOPの方は完全にフリーズしてしまった。

「あーつと……ゴメンね？思い話になっちゃって。」

「う、ううん……大丈夫だ、よ？」

「ホントに私つたらこうなんだよね……、隙あらば自分語りしちゃうの……。治そう治そうって思ってるんだけど、自力じゃ中々治せないんだよ。ホントダメな指揮官だ

なあって思っちゃう。」

「し、指揮官はダメじゃないよっ!!」

「ふふっ、ありがとう……。もしかしてその言葉って、私が好きだから言えるの?」

SOPの顔が一気に熱くなる。ハメられた、と気づいた時には既に手遅れ。まるで「落ち込んでいる憧れの先輩を一生懸命応援する女の子」みたいな発言を引き出され、上手い具合に遊ばれてしまった。

「……冗談よ、SOPはちゃんと自分の事を大事にしてるってわかってるからね? まあ持ち上げてくれたのは嬉しかったけど。」

(ふええ……。顔赤いのバレちゃってるし、きつと全部バレちゃってるよお……。)

もうお喋りどころではなかった。あの手この手で乙女の純情を弄ぶロクデナシと張り合えるような話術をSOPが有しているはずはなく、ただ何も言い出せない気まずい時間が過ぎていく。

「……そうだ、ちよつと聞きたい事があるんだけど。」

「……ふえ?」

「SOP。この作戦報告書、貴女が書いたんでしょ?」

そう言って引き出しから出したのは、一枚の作戦報告書。SOPが書いたものらしいが、肝心の内容は「鉄血をいっぱい壊した」とか「目玉をいっぱい引っこ抜いた」とか

小学生の日記ぐらいの文章量だった。普通の指揮官が相手なら即刻お説教モノである。

「だ、ダメだった……?」

もしや自分はやらかしてしまったのではないかと恐る恐る尋ね、もし怒られたらと思うと怖くて目を瞑ってしまふ。そして返って来た言葉は、彼女にとって予想もしていなかった言葉だった。

「……フフツ、ダメじゃないよ。」

「……?」

「頑張って書いたんでしょ?じゃあ全然ダメじゃないよ。提出してくれたらそれでいいの、後は私の仕事だから「上」にはちゃんと説明してあげるからね。」

「え、え……?」

「次からはちゃんと数も数えようね、そしたら『いい子いい子』してあげるからね。」

「う、うん!」

ナターシャはSOPの報告書を読んだ上で、叱るところか逆に優しく「アドバイス」してくれた。今まで何人もの指揮官と出会って来たSOPだが、その多くが人形を都合の良い道具として利用していたり優しいのかと思いきや裏では人形を玩具のように使い倒すクズだった。一方でナターシャは「多少」交友関係が滅茶苦茶なところはあれど、人形の個性と愛情表現を正面から受け止めてくれる人だ。

(ちゃんと数も数えたらいい子いい子・・・他にもやってくれるかな・・・／＼／＼)

そして人形達1人1人に真摯に向き合うからこそ、今までに出会った多くの人形達から深い信頼と愛情を受けてきた。勿論自分に対して恋心を抱いている相手との向き合い方もわかっている。伊達に「ドクター・ロックハート」などと呼ばれちゃいけないのだ。その仕事の最後は決まって相談相手に「気づかせる」。

(そっか・・・わたしは指揮官に褒めてほしかったんだ。ぎゅゅってされてナデナデされて・・・えへへ／＼／＼)

後日、倒した敵の数を頑張って数えているSOPの姿が目撃されたとか・・・

人類悪顕現

「うふふふふつ……」

暗い部屋、その中にいるのは1人の人形。

「新しい子もいいけど……やっぱりこの子達が一番かな♪」

その手に握られているのは、AR小隊の5人が写っている写真。

「居場所は掴んでる……後は向こうが来るだけ……楽しみだなあ♪」

人形が楽しげに笑う足元には、さっきまで戦術人形「だった」ものが転がっていた。

《一方その頃……》

R03基地の作戦会議室にて、ナターシャは上官であるヘリアントスからの通信を受け取った。

『ナターシャ・E・ロックハート、貴官の管轄区域であるR03地区内に鉄血の部隊を確認した。位置情報の確認が取れ次第、すぐに対応にあたるように。』

「了解しました……既に先行部隊が偵察に向かっています。今日中に作戦行動を開始できるところです。」

『クルーガーさんの情報が正しければ、今回動いた鉄血の部隊にはハイエンドモデルが配属されている可能性が高いそうだ。しかも貴官とも関わりが深いらしい《アレ》がいるとの報告が上がっている……』

その瞬間、ナターシャは目の色が変わった。まるで捕らえるべき獲物を見つけたかのように。

『……期待しているぞ。』

「……了解しました。」

2時間後、先行部隊の偵察が終わり作戦会議が開かれた。

「みんな、今回はちよつと厄介な事になるよ。」

R03基地の面々を相手に、ナターシャはそう言い切った。

「指揮官、厄介な事とは……?」

「……R03地区内で鉄血の部隊が確認されたの。しかも……」

手元の機械を弄って、映像を出力しながらM4の質問に答える。

「……コイツがいる。」

映し出された映像には、1人の人形が写っていた。

「指揮官、この人形は……?」

「鉄血のハイエンドモデル『愛好家』^{ラヴァー}、コイツがいる時点で厄介さは5割増しになるから

覚えといてね。」

ナターシャは厄介さがどうか言ってるが、映像を見る限りそんなに厄介な存在には見えないような・・・

「まあ・・・実際にコイツと会えば私が何を言っているのかわかるはずだから、それじゃ作戦の説明ね。」

作戦自体はとてども単純なものだった。『AR小隊が釣り、待ち伏せとライフル部隊の狙撃で迎え撃つ』というシンプルな内容だが、その中にはいくつもの利点がある。

「鉄血がAR小隊の情報を握っているなら好都合、後退する四人を追ってくる敵が多ければそれだけ他が手薄になる・・・最悪罨だと勘付かれても鉄血の部隊をいくらか倒しておけるから損は無い。」

「しかも手の内は仕掛けるまでバレないからこつちが有利・・・でしょ?」

「よくわかってるね、流石Vector。」

「もうずっと一緒にやってるからね、わかるよそれぐらい。」

若干の惚気話は置いておくとして、後は全員の配置と予想される敵の戦力を説明するぐらいで作戦会議は終わった。

《R03地区、グリフィン陣地内》

「AR小隊、配置に着きました。」

「ライフル部隊、作戦配置完了です。」

「遊撃部隊……準備完了。」

『オツケー……作戦、開始!』

作戦の始まりと共に、A R小隊は敵地に突入した。

「M4、前方から鉄血の通信反応がある。だが、これは……」

「はい、敵が少な過ぎます。」

「きつとみんな逃げちゃったんだよ。」

「SOP、相手は鉄血よ。そんな筈はないわ。』

自分達は鉄血の陣地に入っている。なのに敵がない。それはつまり……

「罨か……」

「ハイエンドモデルがいるならあり得るわ。当然のように何でも仕掛けてくるし。」

見渡す限り無人の街を潜り抜け、鉄血の陣地（と推測できる地点）に辿り着いた。だが、やはりここも無人だった。

「指揮官、鉄血の陣地を制圧しました。ですが……」

『こつちでも察しはついてるよ、静か過ぎるんでしょ?』

「はい……まるで私達を誘導してるみたいで

『待ってたわ。』

「ッ!？」

突然通信に割り込んできた謎の声、聴き覚えの無いその声はまるで透き通るかにように4人の聴覚モジュールに溶けていく。

『やつと来てくれたのね・・・待ちくたびれて1人でいっちゃう所だったわ。』

「なんの話だ、こつちはお前なんかと話す気は無い。」

『つれないわね、アタシは聞きたい事があるからこうやって通信に割り込んだのよ? ちよつとはお話ししましょう?』

「・・・お話?」

『ええ・・・個人的にとつても気になる事なの。』

ハイエンドモデルが直々に聞きたい事、そう言われては無視できなかった。このまま会話を続けてあわよくば向こうの情報を頂こう・・・と考えたが、それは出来ないようだ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・今日下着何色?』

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・は?」」」

想像を遥かに超えた話題に、一瞬4人の思考がフリーズした。

『何色なのかなー、白かなー? 黒かなー? もしかして、ピン・ク? どのようなかな・・・ M4A1みたいな大人しい子の下着がすごいエッチだったりしたらそれはそれで抜け

るし、大人しめなやつだったしてもイメージどおりで濡れてくるし・・・」

「M4、こんな奴の相手する必要ないわ。行きましよう。」

『あー待つて待つて、一応話したい事なら他にもあるの。例えば・・・ナターシャ・E・ロツクハートの事とかね?』

さつきまでのクソみたいな会話とは打つて変わり、今度は真面目そのものだった。

『彼女とはー、それはそれは複雑でビシヨビシヨな関係で結ばれてるんだけどー・・・まあ、それはいつか何とかするとして・・・AR小隊のみんなとはどんな関係なのかな? 愛人?』

「.....」

「SOP、そこで黙るのはほとんど答えてるようなモンだぞ。」

『あ、やつぱり? やつぱりあの性犯罪者また愛人作つて遊んでるの?』

しれつと人を性犯罪者呼ばわりした挙句、ただ答えに困つて黙つちやつたSOPをナターシャの愛人だと思つちやうあたりAIがバグってるんだらう。じゃなきや初対面であんな性欲全開の質問しないし。

「M4、さつきと決めなさい。コイツを無視して先に進むのか、それともこの茶番に付き合うのか。」

『付き合う? 今付き合うつて言った? 期間は!? 同棲の予定は!? 両親の許諾は!? ていうか

挨拶行こ!?!』

「うう・・・」

「鉄血のクズめー! M4をいじめるなー!!」

『ああ良い! すごく良い! 田村ゆ〇りボイスで罵倒されるの股間に来る!!』

「気持ち悪っ・・・」

SOPに罵倒されるのが大変気持ちよかったですようで、通信では伝わらないがラヴァーのアレはビツショビショだった。なんなんコイツ。

『じゃあねく・・・今夜はラブh『黙れ腐れ変態』ブツリツ

指揮官!?!』

『よくわかったでしよ? ラヴァーがいかにかサイコな性犯罪の化身かって!』

「[[[[は、はい!]]]]」

通信越しに伝わってくる怒りの声。何がそこまでナターシャの怒りを増長させるのかは不明だが、少なくともラヴァーの通信に割り込んで無理矢理回線を閉じさせるぐらいいには怒り心頭なようだ。

『それよりも! 北部で鉄血の部隊が移動してるよ! 遊撃部隊だけじゃ抑えきれないからAR小隊も協力して!!』

「了解しました!」

この出会いが後に重大な事件を生むのだが、それはまた別の話し・・・

存在しない部隊

このR03地区は最前線から一步引いた位置にあり、最前線のS09地区あたりを迂回した鉄血の部隊が確認される事が度々起こる。先日遭遇した「ラヴァー」はよくこの手の地区に現れては、多大なる迷惑をかけて去っていく傍迷惑な存在なのだ。そしてR03基地の指揮官であるナターシャにとつて奴は不倶戴天の敵であり、なんとしても引つ捕らえてやりたいぐらい敵対意識を向けている。

「ラヴァーの出現、それと失踪か・・・」

「指揮官・・・あのハイエンドモデルがそんなに重要なんですか？」

「M4・・・私とあの性犯罪者（↑ブーメラン）は色々ややこしい因縁があるの、そこそ親の代からね。」

ナターシャとラヴァーにはそれはそれは長くて複雑な因縁があるのだが、あまりナターシャが話しながら知らない為に知っている者は限られている。Vectorあたりなら知ってるかも・・・教えてくれるかは別問題だが。

「まあ、また行方をくらましてるみたいだし・・・次に会った時仕留めればいいわけだから、お疲れ様。」

お疲れ様と言われても聞きたい事が色々あるのだが、それを聞くような度胸がM4には無かった。追い出さすようにM4を退室させたナターシャは静かに溜息をついた。

「はあ・・・、最低と最高がドライブデートしてる気分。」

ラヴァーがもたらす被害はとうとう本人がいなくてところまで及び、ついには顔も合わせていないナターシャにさえ被害が出始めた。しかし現状は悲観するばかりでもない。ラヴァーとの接触直後、とある4名の人形がR03基地への所属移転を願い出たのだ。「指揮かーん？この基地はお茶とか出ないの〜？」

今まさに執務室のソファで茶を要求している彼女・・・「UMP45」と、彼女が所属する部隊である「404小隊」はラヴァーとの接触後にやって来た。時系列から考えて十中八九ラヴァー絡みなんだろうが・・・貴重なエリート戦力であるため余計な詮索はしない事にする。

「お茶ならあるよ、はいどうぞ。」

因みにUMP45が率いる部隊は表向きは存在せず、隊員もそれぞれ別の部隊に所属した後に行方不明扱いになっている事も把握している・・・なんでナターシャがこんなに詳しいのか、その点は考えてはいけない。

「うちは色んなところと繋がりあるからね、他の基地じゃこんなに上物なお茶は飲めないよっ。」

「もちろんわかかってるわよ．．．？このお茶がどこから貰ったものかもね。」

「おお怖い怖い．．．『耳』がいい女の子は恐ろしいねえ。」

一見するとただの呑気な会話に聞こえるかもしれないが、両者とも目が笑ってないせいで殺伐とした空気が発生してしまっている。誰が入ってこようものなら失神するかもしれない．．．

「うちは人形の経歴は問わない主義だからね、来るものは拒まず去るものは追わないけど．．．」

「．．．『裏側』まで来たものは話が別って事でしょ？」

「そゆこと。多分だけど貴女『達』って、私の裏側まで見ちやつてるんでしょ？」

ナターシャの問いに45は何も答えない。その沈黙が何を意味し、何を伝えようとしたものかはナターシャ次第である。

「うちにいる以上は何をしようと自由だよ。他所様からの依頼があればそっちに行ってもいいし、逆に私の依頼を優先したっていい．．．でも、せめて他の子とは仲良くする事。」

「．．．仲良くっ？」

「そ、仲良くできなきや一つ屋根の下で一緒に暮らしてる意味がないからね。」

45は意味がわからなかった。この基地へは任務で来ているだけ、それが終わったら

サヨナラの予定なのだ。それなのに、仲良く？彼女には不要な事だ。

「まあ、他の子とお喋りしてれば自然と打ち解けるよ。先ずは食堂でも行ってみれば？」
「・・・そうするわ。」

程よく厄介払いされた気もするが、向こうが食堂に行かす気なら逆らう必要もない。この程度で腹を立てて騒ぎを起こすような問題児ではないのだ。

「・・・ああ言っただけで仲良くできるなら、私も苦労しないんだけどな。」

ガツチャ「よう指揮官、私と「ジャックダニエルなら今は飲まないよ。仕事終わってからね。」ちえっ・・・」

入ってくるなり一緒に飲んだくれようとしたM16、大方M4と一緒に飲もうとしたんだろが真面目な彼女はそれを拒否。そして独り飲みするのは寂しいからとお相手を探して今に至るといった具合だろう・・・

「お酒はいいけど、飲む時間と場所と量は気をつけてね。M4に嫌われるかもしれないから。」

「おいおい、私とM4は固い愛情で結ばれてるからな。嫌われるなんてそんな事は・・・」
「この前『姉さんがお酒飲んでばかりでいつか倒れたりしないか心配』って言ったよ、早めに手を打たなきゃ大惨事かもね。」

「・・・え？」

思わず硬直してしまったM16だが、ナターシャにとつてその話はとりわけ大事な事じゃない。むしろM16がここに来た理由・・・何を話す気だったのかが知りたいのだ。「・・・それで？本当は飲み仲間を探しに来たわけじゃないんでしょう？」

「あー・・・そうそう、さっきここから出てきた人形の事なんだけどさ・・・」

「UMP45と、404小隊の事でしょ？わかってるよ、彼女達が存在しない筈の人形だってことは。」

「なんだ、知ってたのか・・・」

「それについて言及しようとしてるあたり、M16も詳しいんでしょう？彼女達について。」

言いたい事を先に知られてしまっていたM16だが、せめてこれだけは自分の口から伝えようと話しました。自分と404小隊の隊員である「HK416」の因縁を。

「アイツはいつもいつも私やM4にちよつかいかけてたしなあ、今も同じ基地にいる以上接触は避けられないし・・・何とかM4だけでも助けてやりたいな。姉として。」

しかし向こうがM4シリーズ全般を目の敵にしている以上、M16がどう足掻いたところで現状は何も変わらない。むしろ向こうがあーだこーだ言い出す好奇を作り出しかねない現実には彼女は顔を顰めた。だが、幸いにもここはR03基地である。

「フッフッフ・・・そのお悩み、お姉さんに任せなさい。」

「・・・？」

「名乗りたくて名乗ったわけじゃないけど、私って『ドクター・ロックハート』って呼ばれてるんだよね。」

完璧・・・？

ナターシャ・E・ロックハート、彼女は戦術指揮官としての業務を全うする傍で、もう一つの仕事を兼任している。(薙)メンタルカウンセラー、ドクター・ロックハートとしての仕事である。

「情報が確かなら、今日もここにいる筈なんだけど・・・っと、いたいた。」

彼女は今日も指揮官としての仕事をチャチャッと終わらせ、自身のライフワークと化している戦術人形達へのちよっかい・・・もといお節介焼きの時間に入った。先日M16A1との会話で話題に上がった「問題児」を探しに基地内を散歩してみたところ、宿舎でタイムングよく目当ての人形を発見した。

「く〜んに〜ちわ〜♪」

「・・・何よ。」

お目当ての問題児「HK416」。M4シリーズを目の敵にし、事あるごとに自分は完璧だなんだと口にし、酒を飲ませれば誰にも止められない暴れ馬と化す。そんな問題児が目の前にいる彼女である。

「HK416ちゃん?ちよつとお話いいかな?」

「・・・気安く呼ばないで。」

「そんな事言わずにさ、ホラおいで。」

ナターシャはこうなったら梃子でも動かないのである。それを知ってか知らずか416は観念して話につきあつてやる事にした。

「何よ、話つて。」

「いや〜ちよつとだけ、ちよつとだけなんだけどさ〜。小耳に挟んじやつたんだよね。貴女が喧嘩一歩手前な事してらつて。」

「・・・喧嘩じゃない、あれは向こうが仕掛けてきた。」

彼女が言うには「自分はM16が酒を浴びるように飲んでいたのを目撃し、向こうが煽ってきたからノつただけ。自分が暴れたのは酒を飲ませた向こうのせい」らしい。

(どつちもどつちだなく、本当なら。)

思わずそう言いかけてしまったナターシャ、そもそも煽られたからつてノルな。酒の勢いで暴れるぐらいなら自制しろ。煽った(?) M16も悪いつちや悪い。いくら相手が酒癖悪いからつて、やたらに煽つたら喧嘩になるつてわかれ。

「まあ・・・とりあえずM16にも後でお説教だけど。416ちゃん、悪いのは貴女もだよ。」

「・・・」

露骨に機嫌が悪くなった。当然と言えば当然なのだが、プライドが天より高い416は自分の非を中々認めない。だから周りとの衝突は絶えず、事あるごとに周囲の反感を買ってしまうのだ。

「そんなに気に食わないなら相手しなきゃいいのに・・・、何でそんなに喧嘩しちゃうの？」

「・・・」

（だんまりか・・・さては、この子探られたくない腹があるな？）

大当たりである。この416、いつも秘密裏に動いているせいでこれまでの作戦行動が全て探られたくない腹なのである。普通のコミュ障とかならナターシヤの専門分野なのだが、ここまで範囲が大きくなると一個人が手を出せるモノじゃない。相談室の話だけ仄めかして終わるのが1番だ。

（普通のコミュ障や問題児ならまだ何とかかなるんだよね・・・この手の子とはよく出会うし。）

「・・・何？」

「いや別に？どんなお話しようかなって考えてたところ。」

ドクター・ロックハートと呼ばれたその手腕を振るい、416の「中」へと一歩ずつ進んでいく。彼女が何を考え、何を記憶し、何を内に秘めるのか。その心を包み込む「H

K416」という仮面を外した時に何が残るのか・・・

「喧嘩したいなら喧嘩すれば良いし、したくないなら喧嘩しなければ良い。でも、これだけは覚えておいて。『他の子と仲良くして、その日その時を楽しく生きれば良い・・・。刹那の時間を最大に。』って。」

「・・・指揮官?」

「貴女が誰か1人だけ、一緒にいる時間を楽しめる相手がいればいいの。」

「1人・・・」

そう言われても、自分にとつての「楽しめる相手」とは誰かがわからない。小隊の間は所詮偶々一緒にいただけだし、更には厄介な「置物」までいる始末・・・

「別に今すぐに見つける必要はないよ?ウチにいる間に見つけてくれればそれで良いし・・・何よりも、無理して見つけたんじや意味がないからね。」

自分が今この瞬間を楽しめる相手を見つける・・・口で言うのは簡単だが、それを実行するのは難しい。特に416にとつては難題の極みであり、ともに他人とコミュニケーションを取らない彼女がその相手を見つけるなど無理がある。一応ナターシャだつて応援はしてくれるだろうが、彼女は重度の変態性を有しているためいつ爆発するかわからない恐怖があるのだ・・・もうやだこの基地。

「用が済んだなら帰って・・・」

「はいはい、ナターシャは忙しいからすぐに帰りますよつと。お悩み相談が忙しいし。」
 風のようにナターシャは去っていき、後には呆気にとられる416だけが残された。
 (・・・指揮官。)

本当はもう少しぐらい話しても良かったし、なんならお悩み相談室とやらに通うのも良いかもしれない。だが指揮官に悩みを相談するのは外聞がちよつと・・・いや、かなり気になる416にはハードルが高すぎた。

(余計なお世話なのに・・・)

《その夜・・・》

ナターシャの執務室は静かだった。自分で入れたコーヒーを飲みながら残った作業に手をつけては、416が相談にこないかチラチラ確認しているせいで仕事が全然進んでいない。

(流星にまだ来ないかな・・・)

その時、扉の外に誰かがいる気配を感じた。よく目を凝らして見てみると見覚えのあるベレー帽風の帽子がチラチラ・・・完全に416である。彼女は暫く部屋の前をウロウロした後、そそくさと立ち去って行ってしまった。

「ふふっ・・・」

どうやら、なんとかなりそうだ。ナターシャは安堵した。

前線基地奇襲作戦

ナターシヤの気質のせいで珍事ばかり起こるR03基地だが、たまには民間軍事企業らしい仕事だつてする。いくら最前線から離れているとはいえ鉄血の脅威が無いわけではないし、部隊単位で鉄血の群勢を観測する事もあれば基地の類が観測される事もある。今日は後者だった。

「指揮官様、こちらが偵察部隊から送られて来た映像です。」

「ありがとう、カリン。」

「いえいえ！私は指揮官様のお仕事をお支えするのが仕事ですから！」

カリーナに礼を送り、タブレット端末で偵察部隊からの映像を確認する。前線基地と思しきそれはナターシヤの想定以上に頑強であり、正面入り口の警備は嚴重で対空兵器や司令塔らしき施設まで備えられている。ハッキリ言つて前線基地に配備するには過剰な火力と防御力である。普通ならばこのような鉄壁の守りを目の当たりにしたら迂回して他の地点を攻めようと思うのが道理だが、彼女には避けるわけにはいかない理由がある。

「ラヴァー……」

映像の端に写り込んでいた宿敵の姿を見てしまったのだ。この基地にラヴァーがいるかもしれないと思ったナターシャの決断は早かった。

「カリン、みんなを集めて。作戦会議するよ。」

「はい！すぐにでも集めます!!」

《1分後・・・》

「すぐ過ぎないかなあ。」

宣言どおりすぐに集まった人形達、迅速が過ぎるかもしれないが何事も素早く動いて損は無いから特に触れずにいく。

「私達はグリフィンの偵察部隊が観測した前線基地を攻略する。そのための作戦を今から説明するんだけど・・・M4、何か言いたそうだね。」

「指揮官、偵察部隊が前線基地を発見したとの事ですが・・・本来なら迂回して後方を占領してからじつくりと干上がるのを待つべきでは？」

「その提案は至極真つ当で常識的なんだけど、どうしても時間をかけていられない理由があるんだよね。」

ナターシャが指差したのは一枚の画像、前線基地の正面入り口に佇む人影が映っていた。画質が荒くてハッキリしないが明らかに目立つピンク色の髪は嫌でも目につく。

「ラヴァーよ、あの卑しくて薄汚いドブネズミがこの基地にいるかもしれない。それだ

けで理由は充分……他に質問は？」

他人からしてみればそれはナターシャだけの理由であって他の誰かが戦う理由にはならない。一応この前線基地を攻略できれば防衛システムを一部再構築してグリフィン側の前線基地にできるメリツトはあるが……

「質問いいか？」

「はいM16。」

「見た感じだと随分守りが硬そうなんだが……攻略の手立てはあるのか？」

「もちろん、とびつきりの『腕利き』が応援に来るからね。」

ナターシャの見せた笑顔に嫌な予感がしたのはM16だけだろうか……この堅牢な基地に入り込めるような「奴ら」を知っているせいで寒気が止まらない。

「先ずは警戒網を掻い潜って基地まで出来るだけ近づくと、その後は私が要請した『応援』が動き出す合図として簡単な暗号を発信する。そうしたら……基地の武力なんて塵みたくないものだよ。」

《前線基地近郊……》

前線基地近郊に張り巡らされた監視の目を掻い潜り、夜の闇に乗じて最大限まで接近する事。それが作戦の第一段階だった。AR小隊をはじめ、他の部隊も基地の監視に引つかからないギリギリまで肉薄した。この先どうするかはナターシャが策を用意し

ているらしいが、その内容はこの場にいる誰も知らなかった。通信が傍受されている可能性を懸念しているようだ。

「M. I. V.: 1. 0. 14。」

M4は当初の予定通り（通信先を偽造した）ナターシャに向けて原始的な暗号を交えて送られた・・・「M. IV」が「M4」、「I」が「第一段階」、「0」が「0」なのはいいとして、「I4」を「K」と読むのは無理があるだろう。確かにこの通信が傍受されたとして、この暗号を即座に解読することは出来ないかもだが。

「・・・周囲に敵影無し、サーチライトの明かりが僅かに見えるだけ。」

「でもここまで誰もいなかったよね？みんな帰っちゃったの？」

「いや、この辺りは鉄血の巡回ルートから外れてる。向こうも私らがこんな近くにいると思っけないのかもな。」

「姉さん、だとしてもいなさ過ぎです。」

「ああ、少なくとも私ら以外に誰かが小細工を仕掛けてるようだ。」

前線基地自体の防備に比べ、周辺に展開している部隊の密度と巡回はあまりにも手薄だった。誘われているような不安を感じながら、攻撃開始の合図を待つ。

《前線基地内、司令塔最上階》

「・・・来た、先生からの合図。」

前線基地内の一角、司令塔の最上階に屯している4人の人影。「先生」なる人物から送られてきた合図を確認し、それぞれが行動に移る。1人が基地内のセキュリティと火器管制システムをハッキングによって無力化し、残る3人は退路を確保し一部の通路にトラップを設置する。誰もが洗練された動きで速やかに仕事をこなし、システムを完全に掌握する。

「火器管制システム・・・セキュリティシステム・・・オールグリーン、いつでも解除できる。サーチライトと非常シャッターは手動操作で動かせるから意味無し。『AW50』、外に出てサーチライトを狙撃する準備をして。」

「わかったよ・・・全く人使いが荒いなあ。」

「退路は一つだけ、『AR-110』と『MP9』は退路の安全を保持。」

「はい。」

「AR小隊もここにいるのかあ、久しぶりに会いたいな・・・」

準備は整った。後は仕上げをするだけ。

「OK・・・全システム、停止!!」

強襲

鉄血の前線基地周辺に忍び寄っていたM4達。ナターシャから来るはずの合図をずっと待っているが、未だに合図は無い。

「指揮官から通信は無い、まだ攻撃のタイミングは来ない・・・M4、貴女も作戦の全容は聞いてないの?」

「はい・・・指揮官は『その時が来たら、合図が来るより前に出番だつてわかるはずだけどね。』つて言つてて・・・」

「何が起きるかもわからないのに、警戒と備えはしろつてか。指揮官もここまで盗聴を警戒してんのか・・・ん?」

「どうしたのM16?」

「いや、今何か・・・」

基地の上に誰かが居たような・・・見間違いかと思つたM16だが、直後にそれが見間違いではなかった事を知る。

「・・・ッ!!」

特大の轟音と共に、先程人影を見つけた辺りが爆散したのだ。間違いなく、先程見か

けた人影が仕組んだはずだとM16は確信した。しかもこのタイミングでナターシャからの合図が来た。

『総員ツ！突撃開始!!』

爆発による混乱は鉄血の強みである「徹底した統率」に綻びを生み出した。ただでさえ夜間は統制に支障をきたし易いというのに、鉄血の通信は混乱して各部隊が緊密な連携をとれずR03基地の戦力を前に蹂躪されていった。

加えて前線基地の防衛機能が停止しているのも大きかった。今や基地はただの箱にしかならず、鉄血は「前進すればグリフィンと交戦して壊滅、その場に留まれば支援も無く蹂躪されて壊滅、後退すれば機能停止した基地でジリ貧」という最低な三重奏を聞かされる羽目になる。指揮権を握っている奴が不憫で仕方がない。

「SOP！もう味方以外は全員敵だ！片っ端からぶっ倒せ!!」

「わーい!!」

夜の闇は奇襲を仕掛けるのに好都合、しかもグリフィン側は事前に夜戦装備を備えているおかげで視界を奪われる事なく大暴れしている。ナターシャが夜までもつれ込むかもしれないからって昼間にも夜戦装備を持たせたがるおかげで全部隊に充分な数の装備があり、グリフィンは最初の爆発から一時間足らずで基地周辺を完全に制圧しつつあった。

「正面入り口の制圧、完了しました！」

「スプリングも気合入ってるね、アタシも頑張らなきゃ〜！」

正面入り口を制圧したグリフィン。既に野外にいる鉄血は3分の2が駆逐され、残るは基地内に逃れている残党を狩り尽くすのみとなった。

「ナターシャ、正面入り口の制圧完了。中に入る方法は？」

『もちろん準備完了、M686、正面入り口を開けて。』

ナターシャが小声でボソボソ喋ったかと思ったら基地の正面入り口が開いた。基地のシステムを乗っ取っている仲間がいるらしい。

「どこまで手を回したの？ナターシャ。」

『ちよつと昔の知り合いを読んだだけだつて。』

重工な扉が開ききるのを待たず、突入を敢行する一同。しかしその行動は数発の銃弾に遮られた。

「グリフィンに……R03地区の指揮官。まさかこうも簡単に追い込まれるとはな。」

追い込まれた黒い狩人、ハンターの登場である。本来なら彼女の方が追い込む側だが今夜は逆になった。だがこの程度でパフォーマンスが落ちるようなハンターじゃない。

「だが簡単にやられはしない……来い。」

《基地内部、地下室》

外が大騒ぎになっていく頃、地下道を進む4つの影があった。

「ほら、いちいち寝ようとしなくて歩きなさい。」

「いたいよお、ほっぺ引つ張らないでえ・・・」

「45姉、ホントに探してる物ってこの先にあるの？」

「あら、疑ってるの9？」

存在しない部隊ごと、404小隊であった。

「この基地に目当てのハイエンドモデルがいたのは事実、でも今姿が無いなら記録を漁るしかないわ。」

この基地のどこかにある筈の通信記録、爆発した一角に無ければ地下室あたりが怪しいとあたりをつけてみたらこのとおり。如何にも何かありそうな雰囲気を漂わせる地下通路が存在した。しかもこの通路は45が事前に入手した基地の図面上には存在しない通路であり、何か大事な物を隠すにはうってつけの場所だった。

「そこまでです。」

感情という物を一切切排除したような冷淡な声が通路に響く。404小隊の行手を遮るように現れたのは鉄血のハイエンドモデル、スケアクロウだった。

「残念ね、たった1人で私達と戦うなんて。」

「いえ、残念などではありません。」

スケアクロウは顔色一つ変えず、404小隊と対峙する。全ては自分の任務を果たすために。

(元々、此方の勝ちですから。)

既に決着は付いたも同然の一戦が始まった。

《一方その頃、正面入り口では・・・》

正面入り口の戦いは激しさを増すばかり。ハンターは付近にいるグリフィンの人形達を一人ずつハントし、少しずつ戦況は変わりつつあった。

「グリフィンの人形もこんなものか、もう少し狩りがいがあると思ったんだがな・・・」
夜の闇はハンターも望むところ。例えサーチライトが軒並み破壊されて視界が悪かろうとも、その脳髓A1に刻まれた戦闘技術が敵の位置を教えてくれる。地形から敵の位置を推測し、2丁の拳銃から放たれる凶弾が戦局を覆しつつあった。しかしナターシャも無駄に戦力を擦り減らしているわけではない。

『スプリング、WA2000。準備はいい?』

「勿論です。」

「私に仕留められないわけないでしょ!」

2人のスナイパーがハンターを狙う。慎重に照準を合わせ、獲物が動きを止める一瞬の隙を待つ。チャンスは僅か、ハンターが攻撃のために動きを止める一瞬。

「今っ!!」

全く同じタイミングで発射された銃弾、正確に狙い済まされた狙撃だった。

「・・・ッ!!」

「ハンター・・・気づいてなかったって言わせねえぞ・・・」

「処刑人、今の狙撃で私が倒れると思ったか?」

このタイミングで現れた援軍、大剣の一振りでも銃弾を弾く剛力の持ち主は鉄血にも一人しかない。

「指揮官様! もう一人ハイエンドモデルが!」

『OKスプリング・・・手は打ってあるよ。』

ナターシャの打った一手は彼女に打てる最強の一手だった。ちよつとした応援を呼ぶだけなのだが、その応援は恐ろしく強力で頼りになる存在だ。

『追加労働、報酬なら用意するから頑張っつてね皆。』

ハイエンド

夜の闇と静寂を引き裂く銃声と爆発、鉄血のハイエンドモデル2体が大暴れしていた。「ハンター」と「エグゼキューションナー」、たった2人のハイエンドによって戦局は混乱を極めていた。元より馬力というか性能が段違いなハイエンドはグリフィンにとつて厄介な存在であり、こつちやつて大暴れしている現状は最悪にも程がある。

「ナターシャ、こつちは既に半分が撤退中。これでどうやつてアレを倒す気?」
「大丈夫、すぐに応援が来るから……って、もう来たか。早いな〜」

木陰から姿を現す四つの影、ナターシャの言っていた応援が到着した。

「ロックハート指揮官のとこの……Vectorだよね?ちよつと力貸すよ?」
「ナターシャの言つてた応援?何処の隊?」

「よくぞ聞いてくれました!アタシらは「ちよつとちよつと、そんな呑気な事してる場合じゃないって!」「いや、名前ぐらいちゃん」と「後でいい」「い、いやだから「隊長さんの言う事聞きなさい。」「わーったよ!ゴメンね緊急事態だから色々後回し!さつさとアイツら仕留めて戻るから!!」

応援に來た連中はわつちやわつちやと騒ぐだけ騒いで風の様になつていった。一人

とり残されたVectorはとりあえず彼女らの後の追った。

「ナターシャ、今のが・・・応援なんだよね？なんだか頼りにならなそうだけど？」

『いやいや大丈夫だつて、実力ならVectorやAR小隊とどっこいどっこいだし。』

不安しかないが、長らく一緒にやってきた相方がそう言うならとVectorは1人納得した。

一方その事前線基地の地下通路にて、404小隊はスケアクロウを完全に追い詰めていた。通常グリフィンの戦術人形はスペック的にハイエンドに勝てないものだが、404は少々特殊な存在故にその「通常」を見事にひっくり返す。

「・・・諦めなさい、もう戦う力は残っていないんでしよう？」

「諦める必要などない、もう既に勝利しているから・・・」

416の問いに答えるスケアクロウを尻目に45が端末を弄り倒す。だがほとんど情報が既に削除されており、僅かに残された断片的な情報を回収するだけとなった。

「45姉、それが欲しかったの？」

「そうよ、ただ求めてた物そのままじゃなかったけど。」

45が握りしめるデータディスク、その中には本来なら鉄血の通信記録が刻まれているはずだった。

「データがほとんど削除されてたわ。誰かが意図的に削除したのなら……そこにいる奴か、そのバックにいる奴ね。」

そして地上では2体のハイエンドを葬るべく一同が奮戦していた。

「AW50！援護して!!」

「りよーかい！時間外労働だけど……どうだ!!」

放たれた弾丸は真っ直ぐに飛び、エグゼキューションナーの右脚に鮮血を滴らせる。一瞬だけ動きが止まり再び動き出すまでの僅かな時間に、1人の人形がその銃口を向けた。

「チエックメイトです、大人しくしてればこれ以上痛い目には遭いません。」

「へっ……そんな小せえ銃で止まるかよ……ッ!？」

エグゼキューションナーが抵抗しようとした瞬間、1発の銃声が響き、エグゼキューションナーは倒れた。

「隊長さん、生け捕りにするって『あの人』は言っていましたか?」

「生け捕りが『望ましい』というだけ。」

「じゃあ仕方ないですね、報告はそう言う事で。」

上への報告を考えている2人に襲いかかる影、相方を討ち取られたハンターが敵討ちに燃える。しかし2人も無策で突っ立ってたわけではない。

「・・・時間外労働。隊長、追加の給与は何処に申請したらいい?」

「鉄血にでいいんじゃない? お金無さそうだけど。」

ハンターの挙動を捉えた弾丸が1発、彼女の脳天を貫いた。

「でもコイツら多分捨て駒だよ? じゃなきゃこんな簡単に終わらないもの。」

「鉄血お得意の試験運用と学習かあ・・・時間外労働が増えそう。」

若干一名がぼやく中、ハイエンドモデルが討伐された事により他の戦域でもグリフィン側が勝利を重ね、前線基地は制圧されつつあった。中はほとんどガラ空きだし。

「片付いたみたいだね。」

Vectorが合流した。

「・・・指揮官に連絡は?」

「もうした。今基地内の制圧に移行してる。」

「じゃいいや、それじゃまた近いうちに。じゃあね〜」

ハイエンド2体をあつさり蹴散らした謎の応援は風のように去り、すぐに姿は見えない

くなる。

「ナターシャ、基地の制圧は？」

『今終わったところ、割とあっさり片付いてくれたみたい。後は最低限の部隊を基地に残したら、今日は撤収でいいよ。みんなに伝えておくからね♪』

一夜のうちに起きた大騒動、鉄血の前線基地を襲撃する作戦はグリフィン側の完全勝利に終わった。だが彼女達はまだ知らない。この裏で暗躍する存在が……

事後処理と明日への前進

「・・・つまり、件の前線基地を改修してこちら側の前線基地として利用しようという事か？」

「はい。設備の大半が無傷で確保できたので、多少の改修でも基地としての機能は十分に確保できるかと。それに『鉄血に占領されたエリアをグリフィンが解放した』というイメージ戦略も狙えますし。」

グリフィン本社にて、ナターシャはクルーガー社長と対面し作戦の報告をしていた。前線基地が陥落した事により鉄血は部分的に撤退を始めており、その影響で放棄されたエリアもいくらかある。横槍が入る前にそのエリアと前線基地をグリフィンが接収するべきと直接提案したかったのが理由だが。

「いいだろう、だが直ぐには動けん。まずは前線基地の改修から始まるだろう。」

「いいですよ、待つのは慣れてるので・・・では。」

「・・・待ちたまえ。君があの前線基地を攻撃した理由、やはり・・・」

ナターシャの脚が止まった。

「それ以上は言わないでください。あのクズの名前は・・・」

ナターシャは社長室を去った。

「ナターシャ・E・ロックハート、やはり、怨みは消えてなかったか……」

《R03基地》

「指揮官、昨日の襲撃作戦の報告ですが……」

M4A1は昨日の襲撃作戦について報告しようとナターシャのいる執務室を訪れたが、忙しく動く彼女を見て報告してもいいか戸惑った。まあナターシャは書類仕事の片手間にパソコンを弄れるぐらい器用だから報告はいつだって受け付けてるが。

「あ、それはもう大丈夫。上にも報告してあるし、形式だけ守ってくればいいから。」

「はあ……」

「気にしてるの？あんまり活躍出来なかった事。」

「はい……」

「気にしないの、ハイエンドモデルを仕留める事よりも基地を制圧する方が重要だったんだから。」

M4を励ますと同時にナターシャが処理している作業、机の上に積まれた書類は全て「前線基地の改修及び放棄されたエリアの再建計画」と銘打たれた物である。ようは「言い出した奴が責任持って管理しろ」というクルーガー社長の命令だ。一応ナターシャの能力を見極めた上でやらせているのでパワハラではない。いいね？

「指揮官、それは……」

「制圧した前線基地の改修と、グリフィンが解放したエリアの再建……管轄はここだから防衛と、市街地が再建した後の治安維持はうちの仕事なんだけど……頭数がねえ……」

「そう言うと思つてましたよ指揮官様!!」

「うわびつくりした!!」

勢いよく開かれた扉から飛び出てきたカリーナ、どうやら金の匂いがしたらしい。この守銭奴め（褒め言葉）。

「戦術人形の数が足りないと言ってきましたー！I・O・Pには直ぐにでも発注をかけられますよ!!何人ぐらいお必要ですか!?!」

「いや……私のツテを使って直接スカウトしてくる。時間はかかるけど安く済むし、何よりしっかり言う事聞く子が来た方が問題起こさなくていいしね。」

そう、ナターシャは大抵の指揮官がお世話になるI・O・Pに発注をかけず自分の足で部下にする人形を探るのである。このやり方に苦言を呈する部外者もいるが、スカウトされた人形達はより良い環境を与えてくれたナターシャに恩返しをするべく頑張るのだ。だいたいは廃棄処分寸前の人形を拾ってくるわけだし。

「これから忙しくなりそうだしね、新兵でも数を揃えれば治安維持ぐらいできるから。」

「むう……ま、まあそれでも私は構いませんし……」

「どうやら勢いよく出てきた割に上手く躲されたのが納得いかない様子のカリーナ。でも手法はどうあれ基地内の人形が増えればシヨップの売り上げが伸びてカリーナの財布が厚くなるから結果オーライなのだ。この守銭奴め（褒め言葉）」

「じゃあ早速、明日からスカウトしに行こうかな・・・私がない日は任せたよカリン。」

「はい！こつちにはVecto rさんもいますからね!!」

「M4もよろしくね。」

「は、はい！」

《一方その頃・・・》

「なあんだ、やっぱりあの基地ダメだったんだ。」

モニターを眺めるピンク髪、ナターシャの怨敵たるラヴァーが前線基地陥落の一部始終を見ていた。

「・・・エリザ様の御命令でなければ見せたりしないのですが、その事をお忘れなきように。」

「わかってるよエージェントちゃん♡」

「・・・。」ゾワッ

エージェント、代理人、立場上ラヴァーの上に位置する彼女すらもラヴァーの気持ち悪さには敵わな

いようだ。

「その呼び方はやめなさいと何度も言ったはずですが。寒気がするので。」

「え!? 寒気がする程私の事好きなの!?!」

「いえ、違いますが。」

「式はどこで挙げようかなー? 子供は何人ぐらいがいいかなー? ベッドの上ではどんなプレイをするのかなー? あ、その時はちゃんとかわいいの履いてきてね? タンスの奥にある白とP「お置置きぐらいいは許可されてるんですが?」あちゃー、怒ったエージェントちゃんは容赦ないなー。」

寒気すら感じる程に嫌悪してもコイツは謎の超理論により「自分の事が好き」という都合の良い解釈に到達する。そして「両思いでラブラブなんだからこれぐらいの事は当然」と言い張って風呂や着替えを隠し撮りしたりする。本当になんだコイツ。

「スケアクロウもエグゼキューションナーもハンターもやられちゃったんだねー、やつぱり勝負下着じゃなきゃ負けるんだよー。」

「貴女がエリザ様のお気に入りでなければ今すぐにもA Iを矯正して差し上げるのですが……。」

「ホントは『A Iを矯正されちゃったら、ラブアーちゃんが私の事好きじゃなくなっちゃう! 私はこのようにラブアーちゃんの事が好きなのに!』って考えてたでしょ?」

「……………」

当初の目的はどこへやら、エージェントを玩具にして遊ぶラヴァー。因みにいつもこんな調子でハイエンドの面々をイジっている。迷惑な事極まりなし。

《翌日、R03地区にて……》

「やっと着いたつと……相変わらずここは酷い所だね。」

R03地区の隅、治安も悪く夜の店が立ち並ぶ危険地帯にナターシャは足を踏み入れた。戦術人形に転用できる人形を探し求めてやって来たこの地において人形は「換えが効く女」程度の認識でしかなく、動かなくなった人形が道端に転がっている。

「どこの店から探そうかな……ん？」

視界の端で、何かが動いた。

第一戦役 登場人物図鑑

カリリーナ

ご存知守銭奴な後方幕僚。基地の財布を握っているのだが、最終的な決定権がナターシャにあるせいでお金稼ぎに苦勞している。明らかに黒いアレが見えてるが見せているんだと意見を曲げない。

スコープオン

ご存知初心者御用達のSMG。Vectorと立ち位置が被っている事を気にしているが、貴重なサブタンだから役にはたっている。これからもちよくちよく出てくるよ。

FNC

ご存知初心者御用達のAR。無類のお菓子好きで大量の菓子類を隠しもっているが、ナターシャには大体バレている。スコープオン同様これからもちよくちよく出てくるよ。

スプリングフィールド

R03基地でカフェを営むRF。ナターシャがよくコーヒーを飲みに来るが、毎回山

のように飲むため健康を不安に思っている。彼女にされた告白云々みたいな話は無かった事にしようとしている。後が怖いし。

WA2000

いつも素直になれないツンデレRF。ナターシャの手にかかれば彼女を話の輪に入れる事ぐらいお茶の子さいさいであり、いつも手玉にとられた挙げ句勢いでセクハラまがいの話題にシフトされる。

MI895

ご存知初心者御用達のHG。精神的にはナターシャよりも年上なのだが、年齢的にガタが来やすいナターシャの苦労を憐れんでる。ギックリ腰の痛みはなんとなく伝わってくるらしい。

G3

R03地区内の病院に勤務する人形。戦術人形じゃないから正確にはG3って名前ではないけどわかりやすさ重視でこの表記に。じやなきややり辛いからね。一応もう一回出てくる予定なんだけど・・・

UMP45

存在しない部隊こと404小隊の隊長。ナターシャとはお互い探られたくない部分がある者同士、謎の親近感を抱き合っている。妹が最近「私にも妹が欲しい」と言い出

したらしい。

HK416

存在しない部隊こと404小隊の自称完璧AR。ナターシャとはデレたようなそうでもないような微妙な距離を保ちつつ、たまにお悩み相談に行く。ものぐさな隊員のお世話(?)についても相談したらしい。

ラヴァー／愛作家

鉄血工造の最低傑作。とにかくド変態でセクハラや盗撮は日常茶飯事、しかもそれに対して抗議しても好意の裏返しだと認識して更に愛を深めようとしてくる。挙句の果てにキスが巧すぎて口付けされた女はみんなラヴァーの虜になってしまうため、鉄血の誰もがキスだけはするまいと奮闘している。

髪がピンク色なのは地毛ではなく自分で染めたらしい。

一応全員の情報は掲載するけど、詳しい事は実際に出てくる話の中で語る事にします。

第二戦役 拡張

瓦礫の中から

ここはR03地区の外れ、金と女が腐るほど投げ捨てられる歓楽街。当然人形も打ち捨てられるこの場所はナターシャにとって今すぐ焼却したいゴミ溜めだが、そんな場所でも役に立つ時がある。

「今この辺が動いたような・・・おっと、噂をすれば。」

ゴミと瓦礫の隙間に蠢いていたのはポロポロになった人形、全身に生々しい傷痕が残るその人形はナターシャを見るや否や唐突に暴れだした。

「あくやめてやめて私悪い人じゃないから、ほらコレ！グリフィンのエンブレム！君を助けに来たの！」

「たす・・・け、に・・・」

「そ、早くこんな街出よう。もつといい生活が待ってるよ。」

ポロポロの人形を抱えて歩き出すナターシャ。他にも棄てられた人形は山程いるのだらうが、その全てを助ける事などできはしない。彼女はいつだって目の前で零れ落ちる命を助けるのに精一杯なのだ。

「もうちよつとだけ我慢しててね……絶対助けてあげるから……」

《2時間後、161abにて……》

「で、この子を戦術人形に改修してほしいと。」

「そ。報酬は弾むから♪」

ナターシャが相手しているのは161abきつての天才、ペルシカである。基本的
にナターシャはI・O・Pに発注をかけず、拾ってきた人形を改修する形で自分の戦力
に加えている。正式な取引ではないため一部の職員からは苦い顔をされるが、それでも
改修を依頼されたら断らないのである。ナターシャの本音としては毎回ペルシカに頼
みたいところだが、向こうが忙しい故になかなか都合が合わないので片手で数えるぐら
いしか会った事はない。今回は偶々会えたから依頼を出したわけだ。

「……まあ四方八方から君に協力するように言われてるけど、なんでそんなにこのやり
方に拘るの？」

「自分が助けた相手と一緒に仕事ができるって最高じゃない？」

「だと思った。」

聞くだけ無駄だった。どうせナターシャはナターシャで、変わる事はないとわかつた
だけだ。

「にしても、こんなに傷だらけの人形は中々みないわね……前の持ち主が相当ぞんざい

な扱い方をしてたのか、それとも……」

喉まで出かかった言葉を慌てて引つ込める。目の前にいるナターシャが今にも襲い掛からんとする殺気を放ち始めたのだ。

「お願いだから私のラボで殺気立たないで……」

「ごめんごめん、ついカツとなって……」

「じゃあ修理と改修始めちゃうから、終わったら連絡するわね。」

「OK♪」

修理と改修が終わるのにはいくらか日にちが経つ。その間ナターシャは基地に戻ってやらなきやいけない事がある。ペルシカからの連絡を待つと同じぐらい重要な事である。

「戦力拡充の計画書、グリフィン上層部への申請書、そしてI・O・Pへの修理とメンテナンスの契約書……よし、全部揃った!」

「相変わらず早いよね、あたし手伝わなくても。」

重要な事とは即ち、各所へ送る書類である。これが無ければ戦術人形の拡充だつて出来ず、最悪の場合は犯罪扱いで緊急逮捕である。武力の私物化は認められないのだ。

「まあVectorには日頃頑張ってもらってるからね。少しぐらいは、ゆつくりと

ね。」

各所への書類提出と協議を重ねているうちに日付けはあつという間に過ぎた。そして迎えたお披露目の日、ナターシャはルンルン気分で161a bへと足を運んだ。

「あら、やつと来たわね。」

「やつとなんて事ないと思うな。」

ペルシカとのお喋りは後、何よりもまずは改修を終えたはずのあの子が大事だと急かすナターシャ。だが急かされる側のペルシカは何とも言えない表情だった。

「・・・どうしたの、そんな顔して。」

「いや・・・改修は成功したんだけどね・・・とりあえずその姿を見てほしいのよ。」

ペルシカの背後に立つ人形の姿、ところどころ傷跡が目立つがそれ以上に目立つ物が一つ。その手に握られた、あまりにもデカ過ぎる拳銃である。

「えーつと・・・そのご立派なブツは？」

「知ってるでしょ、戦術人形は素体との相性から銃が選ばれるって。」

「あー・・・この子と相性のいい銃はこれしか無かったと。」

「そう、しかもよりによって市場にも出回ってないような「あー、ストップストップ。後ろのあの子が泣きそうになってるから。」

涙目で拳銃を握りしめる彼女・・・Thunderはプルプル震えてナターシャを見

つめていた。表情はぶつちやけ変わっていないがナターシヤの眼にかかれば泣きそうは事ぐらいわかる。

「泣かないでー泣かないでー、君は強い子だねー・・・ねえ、この子なんて名前？」

『Thunder』よ、大事にしてあげてね。」

「OK、じゃあThunderちゃん一緒に帰ろうね。バイバ～イ♪」

ナターシヤは風のように去っていった。後に残されたペルシカは一人、コーヒーを飲むのであった。

「ここが君の新しい家だよ、まだ何にもないけど・・・」

「家・・・ですか？」

「そ、ここですべて楽しく暮らせるんだよ。」

Thunderはずっと不思議そうな目でナターシヤを見つめている。恐らく真つ当な生活が保証されるような環境に戸惑っているのだろう。なにせ彼女が棄てられていた場所は掃き溜めに等しい街だし、そもそも「道具」ではなく「部下」という形式での仕事も初めてなんだろう。

「何か困った事があったらいつでも呼んでね、すつ飛んで行くからさ。」

「・・・はい。」

初めて自分を「道具」と認識しない人間との出会い、そして近いうちに出会おう事になる「友達」の存在、それらが彼女にどのような変化を齎すのか・・・今はまだ、誰も知らない・・・。

リベンジ・ドール

今日はとてもいい日だ。鉄血の部隊も現れず、朝から陽の光が暖かく降り注いでいる。そよ風が頬を撫で、遙か彼方から小鳥の囀りが聴こえてくる。きつと今日は穏やかな一日になるだろうと、誰もが思っていた・・・ナターシャ以外。

ピンポーン！

「・・・?はーいー!」

呼び鈴の音を聞いてカリーナが対応に出た。それが惨劇の始まりだった。

「えーつと・・・どちら様で『せんせえーツ!!』ギヤーツ!」

ドアを開けた瞬間4つの影が猛突進を繰り出し、カリーナの体を遙か彼方にブチ飛ばした。その衝撃に耐えられなかった彼女は意識を手放して失神し、この事態の下手人達は構わずに爆進し続けた。そしてナターシャがいる執務室に辿り着き、その扉を蹴破つて突撃した。

「『せんせーツ!!』」

その姿を確認した瞬間ナターシャは音速を凌駕するスピードで動き出した。目にも止まらぬ速さで4人を順番に受け止め、自分が座っている椅子の近くに配置した。

「はいはい、久しぶりだね〜皆。もう2年ぶりぐらいかな？直接会うのは。」

まるで何事も無かったかのように振る舞い、4人の訪問者をナデナデして対応する。

「ちよつとナターシャ、何この騒ぎって・・・あつ。」

Vectorの視界に飛び込んで来たのはかつての前線基地襲撃作戦で出会った4人、鉄血のハイエンドモデル2体を1個小隊で撃破した増援部隊である。

「Vectorには先に紹介しちゃおうかな？この子達は「Revengeer小隊」、私もお気に入りの教え子ってところかな？」

「よろしくお願いしますね。」

「・・・先生の副官は譲らないから。」

「ところで前回の労働時間超過に対する特別給与がまだ貰えてないんだけど。先生、早く給与を。」

「AR小隊がいると聞いてすつ飛んで来たんだ！早く感動の再会と行こうか！」

「・・・1人ずつ喋って。じゃないと聴覚モジュールが壊れる。」

いい意味で騒がし過ぎる。因みに誰も飲酒はしてないし草をキメているわけでもない。だが4人共大好きな先生ことナターシャと再会できた事からメンタルモデルがオーバーヒートし、この大騒ぎっぷりである。嬉しいのはわかるが、ここまでハメを外されるとナターシャも困る。ていうか騒がし過ぎて今まさに騒音公害レベルの被害が

出てるんだが。

「久しぶりに会えて喜んでくれるのは嬉しいんだけどね、こんなに騒ぐと皆に迷惑だから。あとA R小隊には今夜にでも会えるから！給与も後！」

ワイワイガヤガヤと騒ぐRevenge小隊に逐一対処するナターシャを見て、自分の相方は底無しの浮気性だと改めて自覚したVictor。なにしろ彼女の預かり知らぬところで教え子を4人も育てていたぐらいだし、後何人の愛人がいる事か……（……なんでこんな事考えてるんだろ。）

自分はナターシャの副官、故に彼女の浮気性をいくらか矯正して少しは真つ当な人間にしたいだけ。決して嫉妬しているわけではない。

「さあて……皆が私のところに戻って来たわけだし、今夜はパーティーだ！スプリングフィールドとカリンに色々発注するぞー！」

「あ、カリーナさつき倒れてたよ。」

「うそーん。」

その夜……

パーティーは極めて素晴らしい時間だった。新顔の参入とその他諸々祝えていなかった祝い事を纏めて祝い倒し、復活したカリーナが仕入れた酒とスプリングフィールド

ドが作った料理で一同身も心も満たされていた．．．10分前までは。「なんでこうなったんだらうね。」

「416は、禁酒．．．」

「素敵だと思わないV e c t o r？昔教えてた子が一人前の特殊部隊になって戻ってくる事つて。ちよつと気にかけてた子が酒を飲んだ途端に服を引き裂いて踊り出した事も含めてね。」

「そのセリフ．．．絶対、ナターシャが最初に．．．」

R e v e n g e r小隊の歓迎会が主目的のはずが、酒気を帯びた途端若干一名が暴走を起こしてしまい滅茶苦茶になってしまった。会場は激闘の果てに倒れ伏す輩や飲み直した輩で秩序の概念が崩壊し、現にV e c t o rも意識が飛びそうである。

「素敵といえばあの子．．．A R — 1 0とA R小隊が再会できたの、すつごく素敵だと思わない？まさに刹那の時間を最大につてね。」

「ナターシャ、それ．．．文章繋がって．．．」

2人がそんな事を言っている頃、件のA R — 1 0はA R小隊と飲み交わして．．．否、飲んでるのはA R — 1 0だけでA R小隊側は酒も喉を通らない状態である。

「いや／＼ホントにもう一回会える日が来ると思ってたさ、なにしろ先生が言うには存在すら非公開情報な特殊部隊やってるって聞いてたし。」

「……」

「つれないなあ、折角こうして一緒に飲める時間がとれたのにさ。」

「あの、AR—10……」

テンションの差に押されながらもM16A1が口を開いた。

「ん？なんて呼べって言ったっけ？」

「AR—10……」

「……先輩。」

「よしよし、よく言えました。」

AR小隊にとってAR—10は教官的存在……本人の言を借りるなら「先輩」にあたる立場なのである。前線でギリギリ合法的な仕事をする傍らに後方で後身の育成に励み、数々の「後輩」を育成してきた中にAR小隊も含まれているのである。

「あの頃は4人共未熟で育て甲斐があつたよね。今じゃ皆立派になつたけど、それでも可愛い愛弟子である事に変わりはないんだから、これからも一緒にツルもうか！」

（姉さん、この感じは……）

（ああ、言いたい事はわかるぞM4……）

((指揮官と同じだ・・・))

AR-110の性格は、びっくりするぐらいナターシヤに酷似していた。こつちに話しかけているようで会話が自己完結しがちな話し方といい、教え子の成長を我が身の如く喜ぶ姿勢といい、あまりにも似過ぎている。生き別れの妹とか言われてもしつくりくるぐらいである。

「あの頃の話だけで夜が明けるまで話せる自信あるよ、やってみる？」

「二二」 ノーサンキューで。 「二三」

「つれないなあ。」

彼女達に分かり合える日は遠いのかも知れない。